家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十三巻　　第六号

日本幼稚園協会

図書室にぜひ1冊お備えください！

新しい保育

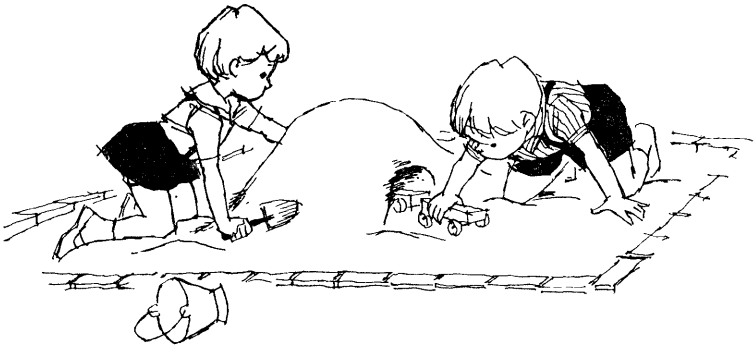
・それぞれその道の第一人者（43人）による豪華な執筆陣
・最近における問題点をとらえて解明
・A5判420P　美麗装幀　￥530

目　次

新しい保育の考え方　東京都立大　山下俊郎
結婚と家族計画　公衆衛生院　久保秀史
遺伝と環境　医科歯科大　田中克己
新しい胎教　大阪市立大　中　脩三
胎生期の問題　逓信病院　街風喜雄
出産期の問題　愛育研究所　津野清男
新生児の問題　愛育研究所　稲葉美佐子
乳児期の問題
　発育と生理　糀谷保健所　宇留野勝正
　乳児の疾病　聖路加国際病院　山本高治郎
　乳児の栄養　愛育研究所　山内　愛
　乳児保育の課題　立命館大学　守屋光雄
　ホスピタリズム　日本社会事業大　石井哲夫
幼児期の問題
　脳の発育　東京大学　時実利彦
　生理と疾病　愛育研究所　内藤寿七郎
　幼児期の栄養と食物　日本女子大　武藤静子
　幼児の体力　東京教育大　松田岩男
　幼児の安全教育　東京大学　小栗一好
　幼児の才能　お茶の水女子大　松村康平
　遊びと指導　東京家政大　森　重敏
　生活習慣としつけ　目黒保育園　鈴木とく
　三才児期の問題　東京学芸大　品川不二郎
　適応の問題　愛育研究所　高橋種昭
　文化財　愛育研究所　竹田俊雄
　精神発達の診断とテスト　東京大学　肥田野　直
心身障害児
　奇形児　東京家政大　跡見一子
　精神薄弱児　お茶の水女子大　津守　真
　肢体不自由児　整肢療護園　小池文英
保育と人つくり　賛育会病院　木下正一
家庭と子ども　東京教育大学　田中熊次郎
母親と子ども　主婦　谷井澄子
幼児の心とからだのつながり　お茶の水女子大　平井信義
幼児の生活とテレビ　文部省　斎藤伊都夫
働く婦人と保育　白金保育園　秋田美子
学校教育における保育　大妻女子大　山本キク
保育者養成の諸問題　名古屋市保育短大　珠川善子
幼稚園の現状と今後の問題　文部省　玉越三朗
保育所の現状と今後の問題　厚生省　山田　昇
児童福祉施設　厚生省　木田市治
諸外国の保育
　イギリス　文部省　奥田真丈
　西独・オーストリア　玉川大学　日名子太郎
　アメリカ　日本女子大　宇川和子
　ソ連の幼児教育の現況　大阪市立大　小川正通
　スエーデン　広島大学　荘司雅子

◎ご注文はなるべく近くの書店をご利用ください。やむをえなければ直接当社に前金で

東京・文京
雑司谷 117　家政教育社　振替東京 72382
電話 (941) 6265



幼児の教育　目次

――第六十三巻　六月号――

表紙　鈴木寿雄

新幼稚園教育要領について

「教育課程」と「指導」……坂元彦太郎…(2)

「社会」の領域について……三木安正…(6)

「言語」指導上の問題点……角尾和子…(10)

「自然」領域指導の問題点……大場牧夫…(14)

「音楽リズム」の領域について……安藤寿美江…(18)

＊　＊　＊　＊

幼稚園の一年間……お茶の水女子大学附属幼稚園…(22)

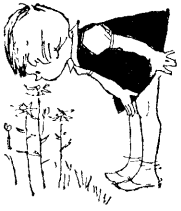
＊　＊　＊　＊

ヨーロッパの旅 (三)……平井信義…(56)

新幼稚園教育要領について

――「教育課程」と「指導」――

坂元彦太郎



＜1＞

昭和三十八年夏、教育課程審議会による、「幼稚園教育課程の改善」に関する答申が出たのにつづいて、十月末には幼稚園教育要領改訂案が発表され、さらに本年三月二十三日付の官報で新しい幼稚園教育要領が告示されて四月よりそれが実施されるにいたった。この一連の経過のうちに、さまざまな反響がまきおこったのであるが、その中には改訂の途上においてとりいれられた点も少なくない。しかしながら、依然として、その批判のなかには、問題として残っていることがいくつかあるので、その多くは誤解にもとづくものであると思われるのではあるが、それをとりあげて論じてみたいと思う。私は改訂のための小委員会の委員長の役をしたのではあるけれども、そこでできた成案をもとにしているとしても文部省内外の多くの人が手を入れてできあがったものでもあるし、私の個人的意見などは問題ではなくなっているのであるが、すなおに、新要領をよみとるという客観的な立場になるたけ立つように努めながら、新要領の意のあるところを述べてみたいと思う。

何よりもまず大きな問題だと思われるのは、今度の要領では、前のよりもずっと、教師のもっているものを幼児に押しつけようとする強制的（？）な態度がつよい、という批判である。この意見は、相当に多数の、いわゆる学者といわれる人たちで改訂の仕事の局外にあった人たちからきかれるものである。こうした幼児教育のシンパであり、ときには本山であると思われる方々の、実際家に対する影響力がひじょうにつよいと思われるだけに、まず、この点についてから論をはじめよう。

新要領が官報で告示され、幼稚園の教育課程の国家的な基準としての性格を明らかにしたことについて、さらに、上の学校なみに、教育課程とか、指導とかいうことばをずっとしばしば使うようになったことについて、今までの幼児教育におけるような、もっと幼児自身の自発的なはたらきを重んじていたやり方から、すっかり教師中心の押しつけのやり方に変っていったように解する人たちが案外に多いのである。

たしかに、官報で告示することなどに関連して、新要領の文章が条文くさいかたいものに傾いたことは疑えないところである。そのことが、一般の先生方に親しみにくいものにしたり、きゅうくつなものと受け取られるようなもとになっていることは、残念ながら事実であろう。しかしながら、このことは、幼稚園が、小学校以上の学校と、同列に肩をならべた正規の教育機関の一つの位置にたつためには、わが国の法的な制度からは、やむをえない措置とせねばならないであろう。いいかえれば、小学校などの学習指導要領のあり方と、同じようなあり方を幼稚園教育要領がするのはしぜんであるといわねばならない。他の学習指導要領などと共通の用語や考え方がここにも貫ぬかれることは当然のことであって、幼児教育をすみっこで特別扱いするのでなく、同じ広場で同等の取り扱いを受けるようにするためには、やむをえないことである。そのために、たしかに若干のマイナスをもたらしたことも否定できないが、しかし、教育要領における文章に、幼児教育界にだけしか通用しない、幼児語に近い用語法や単語をいつまでも踏襲する必要もないのではなかろうか。他の分野の人たちと、共通な用語や語法でもって話が通じることは、いいことではなかろうか。

すなわち、学習指導要領などの用語や語法を、新教育要領にもちこんできていることそれ自身は、私は当然のことと思うが、しかし、一部の人が考えるように、そのことは、幼稚園の教育の中味ややり方が、小学校などのそれと同じものであらせようとするのだ、というふうには、私は絶対に考えないのである。

＜２＞

教育課程、ということばを、小学校の場合と同じように使うようになったことは、小学校の教育課程に関する一切のことがそのまま、幼稚園の教育課程に通用するであろうか。論者の中には、新要領について、そのように思いこんでいる人があるようであるが、そんなものではない。小学校の教育課程と幼稚園のそれとでは、同じような共通の部面もあるとともに、それぞれにちがった独自な部面がはっきりとあるのである。そして、新要領には、そのことを、かんたんにではあるが、明瞭に示してあるのである。

たとえば、「教育課程の編成」についての両書の記述を比較してみるのがいい。「各幼稚園においては、教育基本法、学校教育法お

よび同法施行規則、幼稚園教育要領、教育委員会規則等に示すところに従い、幼児の心身の発達の実情ならびに幼稚園や地域の実態に即応して、適切な教育課程を編成するものとする。」というところは、幼稚園や幼児といったことばを、小学校や児童といいかえた、全く同一の記述が小学校の学習指導要領にある。それぞれの幼稚園が小学校と同様に、つまりは教育課程決定の責任があるとしてあることは、重要な意味をもっているのであるが、それはいまは指摘するだけにすることにして、問題はそれにつづく次の文章であり、これは学習指導要領には同一の項目を見出すことはできないのである。いわく「この場合においては、第二章の健康、社会、自然、言語、音楽リズムおよび絵画製作の各領域に示す事項を組織し、幼稚園における望ましい幼児の経験や活動を選択し配列して、適切な指導ができるように配慮しなければならない。」もしも、強いてこれに相応ずるような文をもとめるとすれば、小学校の教育課程は各教科、道徳、特別教育活動、学校行事等から成り立っている、という叙述より外にはないのである。

この二つの文を対比して、その意味しているところをよく汲みとれば、幼稚園と小学校との教育課程の相異点がはっきりと出てくるのである。幼稚園の教育要領では、かんたんにではあるが、その教育課程の意義や中味を真正面から取り組んで何とかいい現そうとしているのに対して、小学校の学習指導要領では、真正面からそれを定義付けるような努力を少しもしないで、それを組立てている要素をただ列挙しているだけでお茶をにごしている、といえよう。幼稚園教育要領が教育課程の問題に対しているまともな態度を高く買ってもいいのではないだろうか。それだけに、その意味をじゅうぶんに理解する努力をすべきではなかろうか。

この叙述は、三つの句からなっている。第一の句は、各領域に示してあるもろもろのねらいを組織したものである、という面を現わしている。第二句は、園内における望ましい幼児の経験や活動を適切に選択配列したものである、という面を示しているし、第三句は、これにもとづいて適切な指導ができるようになっている、という点を述べている。実質的には、第一句と第二句に中味がかかっているわけであるが、もしも、第一句だけであるならば、大体、小学校の教育課程の定義に似たものになるであろう。すなわち、各領域を適切に組織したものというなら、教科、道徳、特別教育活動を寄せ集めたものとするのとそうちがわないところにある、と見ることができるのである。しかしながら、幼稚園の教育要領は、教育課程のもつもう一つの面、むしろ幼稚園としてはより重要な側面をはっきりとらえているのである。

すなわち、教育課程とは、園内におけるのぞましい経験や活動を適切に選択配列したものである、と大胆にも表明しているのである。もしも、小学校以上の学校であれば、あまりにも経験主義的で

あると排斥されるであろうような表現を、そのままあえてここに使っているのである。どうして、今度の教育要領が、教師中心の押しつけを打ち出しているということになるのか、私には分らない。おそらく、こうした文字の荷っている意味をあまり考えないで、行文の表面的な感じだけにもとづいて、前からの先入見を述べているのではないであろうか。

さらに、教育要領のあちこちをよく読むと、領域に示されているねらいを組織することが、論理的には先行するが、事実的には望ましい活動の配列の方が前面に出ていることが、しばしばたんねんに描き出されているのである。一口でいえば、幼稚園の教育課程は園内における幼児のすべての望ましい活動を配列したものであって、その望ましいとされる条件の中に、領域に示してあるねらいを達成することも含まれているのである。

＜３＞

また、指導という文字が、前の要領に比べると、新要領のいたるところに見えるのは、たしかに疑いのない事実である。そのことから、教師中心の押しつけが新要領の中で横行している、と即断するのは早計であろう。「指導」という文字が、小学校などでは、ある単元を教えて成果をあげるようなことだけを意味するようになってきている。教師が前面に出てことばなどで生徒をひきあげたり、みちびいたりすることだけを指導といっている場合が多いように思われる。しかし、この新要領で使っている指導ということばを、このようにだけ解するのは、どうかと思う。

指導とは、一般的にいって、ある教育的なめあてを何かの方法あ用いて達成することであろう。そして、その方法にはいろいろあり、その場面も、教科的な学習だけではないであろう。幼児の場合の適切な指導とは、幼児の心身の発達の実情に応じ、その生活経験に即して、幼児にのぞましい経験や活動をもたせることなのである。そういう方法を通じて、もろもろの教育的なめあてを達成させることが、幼児の指導の原則なのである。その場合、教師が前面に出て押しつけたり引きあげたりするかしないかは別問題なのである。ある場合にはそうすることがいいこともあろうが、むしろ、多くの場合は、教師が口で指示するよりも、幼児がしぜんにそういう活動がもてるようになるのが、のぞましいことである。

私は、この小文で、教育課程と指導ということばにまつわる先入見を打ちやぶろうとつとめた。その外にも、かすかずの、少し同情と努力とをもって味読すれば解けるであろう誤解がある。しかし、救われるのは、それらが案外現場の先生たちからのものでないことである。よく読めば、ひじょうに幅のある弾力的な実践が期待されていることにいっそう気がつき、行文の末節にこだわらずに、幼児教育の大道を歩みつづけられることを切に期待している。

「社会」の領域について

三木安正

新教育要領の「社会」の領域について具体的な問題を示せということであるが、私どもは現場で子どもたちに接するということをしていないので、適切なことは書けそうもない。

しかし、具体的にといっても、「社会」の領域のなかには、いわゆる〝社会性〟的なものと〝社会科〟的なものとが混在しているので、こうしたものをどう考えるかということなどはまずはっきりしておく必要があろう。

〝社会性〟的なものと〝社会科〟的なものとが混在しているということには何らかの必然性があるのか、それとも単に文字が似ているために便宜的に一緒にしてあるのかということをまず考えてみる必要がある。

幼稚園教育と小学校教育との一貫性ということがよく問題になる。そしてその際幼稚園の「社会」は小学校の「社会科」に、同じく「言語」は「国語」に、「自然」は「理科」に直結するというように考えている人があるが、これはきわめて表面的な考え方であって、幼稚園教育の本質をとらえていないといわざるを得ない。

もちろん、年少時の段階で「社会性」的なものと「社会科」的なものとを峻別することはできないと思うし、小学校の「社会」でも低学年では「社会性」的なものがかなり多く学年がすすむとともに「社会科」的なものになっていく。本来「社会性」的なものは〝教科〟の枠の中で扱うよりも、集団生活の中で養なわるべきものであり、小学校の教育課程でいえば、その四つの〝領域〟(幼稚園でいう〝領域〟とは別の意味でつかわれる)すなわち、教科、道徳、特別教育活動、学校行事などの中で教科以外の三つの領域で養われることが多いはずである。ところが、現在の小学校教育では、四つの〝領域〟ということが設定されていながらも、結局は〝教科偏重〟

であるために、教育の基礎としてどうしても必要な〝社会性〟の養成を「社会」の中に入れておかなければならなくなったのであろう。

つまり小学校教育が教科偏重でなくなり、特別教育活動などにもっと本腰がいれられるようになれば〝社会性〟的なものは教科としての「社会」からははずしてよいわけである。

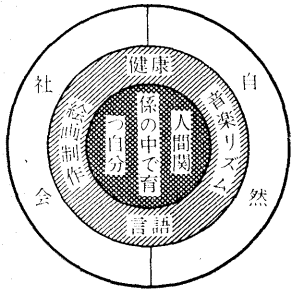
これに対して、幼稚園教育では、子どもの発達段階から考えて、〝社会科〟的な知識を高め理解を深めるというよりも〝社会性〟的な方面を培うことが、より大切である。つまり、子どもたちは家庭という殻から出て、同年輩の仲間との集団生活に入って行くことによって精神も肉体も成長して行く時期にあるので、この時期での教育の基本は〝社会性〟を育てることにあり、その上に思考も言語も、その他の表現活動も発展し、健康も増強されて行く。

このように考えると、幼稚園の「社会」は小学校の「社会」に直結するようなものではないことがわかってこよう。

ところで、小学校の教育課程の編成が、教科、道徳、特別教育活動、学校行事の四つの領域によって編成されるということになっているのに対し、幼稚園では、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の六つの領域によって編成されることになっている。ということは、小学校の〝教科〟と幼稚園の〝領域〟とがその性格を異にするということを示すとともに、そのちがい方について、幼稚園の領域の中には、教科的なもの、道徳的なもの、特別教育活動的なもの、学校行事的なものが未分化な形で混ぜ合わされているものと考えることもできよう。

つまり、幼稚園の〝領域〟は習得さるべき知識・技能を組織化したというだけのものではなく、そういうものを習得する働きをもつ〝人〟をつくる営みを便宜的にいくつかに分けたものということができよう。いいかえれば人間の機能と人格を育てるための指導領域ということができる。

そこで、幼稚園教育の六つの領域は、身体的精神的の諸機能が発達し〝自分〟というものが外界の中で、とくに人間関係の中で拡大して行くために、役立つ経験を調整して与えて行くためのものとすれば、それらは図のような関係で示すことができると思う。この図で健康とか言語とかの文字の位置には何らの意味はない。健康も言語も、音楽リズムも絵画製作も自分についたものであり、自分の外にある自然や社会との交渉の手段ともなるものであるということを示しているのにすぎない。そして、その自分とは、他人との関係、集団との関係において成長しつづけているものであり、言語



も、音楽も、健康すらもそうした社会的成長を基盤として、習得され発展しているということを示しているのである。

そこで、幼稚園教育の領域の一つである「社会」は、子どもたちにその発達に則した生活の仕方を指導して行くこと、（図の中で影をした部分）と、子どもたちが生活をして行くべき社会に関する知見を与えることとの二面が便宜上一つにくられているのであり、幼稚園の段階では前者の方により重点がおかるべきである、ということがいえよう。

そこで、この両者について、いくつかの問題をひろってみよう。

新指導要領では、「社会」の内容は

1、個人生活における望ましい習慣や態度を身につける

2、社会生活における望ましい習慣や態度を身につける

3、身近な社会の事象に興味や関心をもつ

という三つの柱で示されている。

これは、上述の考え方からみれば、1と2は〝社会性〟的なものであり、3は〝社会科〟的なものということができよう。そして外見的にいえば、前者と後者との比率は二対一となっている。そして、1は特に〝個人生活における〟ということであり、〝社会科〟的なものとはかなり離れたものであるが、幼稚園教育での「社会」が〝社会性〟を養うことを基本と考え、しかもその基礎を培うということからいえば〝個人生活〟にまでさかのぼらなければならないということになるのであろう。

ここで、社会性を養うためには個人生活における自立性、自律性乃至は自主性が養われなければならないという考え方が示されたことになり、その指導上の留意点として、「特に家庭との連絡を密にし、幼児の年令や発達の程度に応じ、適切な機会をとらえて、個人生活における基本的な習慣や態度を身につけ、しだいに自主および自律の精神の芽ばえをつちかうようにする」としているわけである。

この点は、今後の幼稚園のあり方の一つとしての家庭教育に対する指導的役割の問題として検討されるべきものであろう。

それとともに、1の細目をみると「明るくのびのびと行動する」とか「遊びや仕事を熱心にし、最後までやりとおす」といったような精神の健康状態のもたらすものがあげられていることに注目すべきであろう。「物をたいせつにする」とか「規律のある生活をする」とか「よい悪いを区別できるようになり、考えて行動する」とかは、そうした精神の健康の上に求められるものであって、単なる「しつけ」とか旧式の道徳とかで教えこむべきものではないと思う。そのように考えると、現在の子どもたちの家庭とか社会とかの生活環境が大きな問題として考察されなければならなくなるわけである。

次に、2については、幼稚園という集団教育での指導に大いに期待される点であり、またすでに実績をあげている点でもあるが、こ

ここに示されているねらいは、よいこと、望ましいことがならべてあるので、これらを金科玉条として〝よい子教育〟をしていったのでは目的を達することはできないかもしれない。一般に教育目標をかかげようとすれば、ただただよいことをならべるようになってしまうのであるが、それを遵守して、「悪いことをしてはいけません」「喧嘩はいけません」「お行儀をよくしなければいけません」といったことばかりいっていたのでは子どもは決して正しくたくましくはならないであろう。

よいことをする態度をつくるためには、悪いと思われることをどのようにコントロールするかということが問題なのであって、そのためには、いわゆる問題行動と正面からとりくんで、その指導の要諦をつかむということが必要なのだと思う。

昨年の九月に幼稚園教育課程の改善について教育課程審議会が文部大臣に答申したものの中に、「……そして、将来、物事を深く考え実行力のある人間に成長するように配慮しなければならない」とある幼稚園教育に対する期待にこたえるためにも、集団生活を通じて個々の人格がみがかれてゆく過程に目を向けて行くことが大切だと思う。

次に、3の内容については、従来、前記の1・2の内容について考えられてきたほどにはよく考えられてこなかったと思う。何かやろうとすれば小学校の社会科と同じようなことをやってしまうことになったのではないかと思う。

それは、結局、幼児の精神的発達の過程において、彼をとりまく社会的事象に対して、どのような関心がもたれて行くかというようなことについての研究が不足しているということであろう。

3の(1)には「幼稚園や家庭でみんなが助けあっていることを知り、感謝の気持ちをもつ」とあるが、これは、おとなであるわれわれが、そうしたことについて感ずるように、幼児たちが感ずることを期待することはできないと思う。〝助けあっている〟などということがどういうこととして幼児たちに把握されるのか、〝感謝の気持〟というものが、「どうもありがとう」という子どものことばの中にどのように入っているのか、などなどと考えて行くと分っていないことのみといわなければならない。

「自分たちのために働いている人」とか「人々のために物を造っている」とかいうのはただ「働いている人」がいるとか、「物を造っている」ことを知るとかいうことよりも、もう少し、そのことの社会的意味を知ってもらいたいという気持がこめられているのであろうが、これらのことが幼児期ではどのように理解されるのか、あるいはまた、そうしたことは小学校にいってから分ればよいのか、そうした教育心理学的な問題は、ほとんど手がつけられていないといってもよいのではないだろうか。

（東京大学）

言語指導上の問題点

角尾和子

教育内容の具体的諸問題――「言語」の領域について――というのが与えられた課題です。いろいろの角度があるのですが、私はここで言語の指導にあたって、どのような困難があり、またどのような問題点があるか日頃感じておりますことの一部をのべてみたいと思います。

○聞く生活は多いが指導の計画はたてられているだろうか

わたしたちの生活の大部分が聞くこと、話すことの生活であり、またその中でも聞くことの生活の方がはるかに多い。このことに気づくと、何の領域の指導をしていても、聞く生活があるのだから、そこに指導もおこなわれ、教育があるはずである。と思いこみがちであるが、どうしてそのようなことでは、真の意味の指導はおこなわれない。

「聞くことについてどのように育つことが期待されて、どのように指導の計画をたて、そして実践していったらよいか」

こう考えるとまったく考えるための資料のととのわないのになげかざるを得ない。

幼稚園教育要領に

人のことばや話などを聞いてわかるようになる。

と一応能力について期待する目標をかかげてあるが「人のことば」「話」そのものに難易があり、それによって聞きとり方もきまってくるわけである。もちろん幼稚園教育の現場にある人々の自主性を尊重しての目標であるとは思うが、一面、この面の科学的な調査研究の不足も否めないものがある。

また

先生や友だちといっしょに話をきく、

友だちといっしょに話を聞く、

などのように、活動や経験の場面とか機会を用意して、その中で自然に子どもは育っていくと考えるのもあまいように思う。指導の機会はたくさんあるが指導の技術がおいつかない。やはり幼児たちの

「聞くこと」の力の、あるいは働きの、進化の状態を綿密にしらべてみて、それにしたがって適当な教材を用いて、適当な指導をおこなうべきだと思う。聞く生活は多いけれど、真の意味で指導の計画は今のところ考えつかない。教えをうけたいと思う。

○聞くとき話すときの態度の指導は身ぶりの指導だろうか

「態度をつくることが大切である」とは聞くこと、話すことの指導にあたって誰もが考えることである。しかし旧要領にあるような

・相手の顔をみながら話す　とか
・話をする人の方へ向いて聞く

などのように、きまった身ぶりを教えこむことでよいのだろうか。これはやはり

・……親しみをもって聞く、
・注意して聞く、
・……親しみをもって話す、

などのように、話すとき、聞くときの心構えや、その時の心の持ち方に重点をおいて、枝葉の身ぶりは自然に個々の個性に応じて出てくればよしと考えて指導する必要がある。それでなければ聞く力も話す力も、ほんとうに身についていくとは思えない。しかもどちらに重点をおくかといえばやはり態度をつくることにもっと私たちは力を注ぐべきであろう。聞く、話すことは場面によく結びついている。実際の場面にのぞんで経験させてみないと身につかないものである。技術的なものだけをとり出しても容易に実践されるようにはならない。

実践にあたっては幼児たちの日常生活の中で、あるいは用意された経験の場で幼児たちの構えを、心のもち方を指導し、また一方ではひそかに教師が聞くこと・話すことの能力向上のための鍵をにぎっていて指導していく必要があると思う。

このように考えてくると、心構えをつくるには、たんに「注意してききなさい」「親しみをもって聞きなさい」のかけ声だけではどうも不十分である。どのように幼児に働きかけたらよいだろうか、今後研究していきたい問題点である。

○会話の時間特設はどうだろうか

私たちが「よい話を聞いた」と感じ入るときは、じょうずに話したその口の動きや手のあげさげでなく、話の内容について感じたときである。話す内容がなければ、話にならない。その意味では急にしつらえられた時間にタネもなくては話せないのは道理である。また話したいと思っても、そこに自由なふんいきがなければ……こんな話をしてよいかしら……と迷ってしまう。また話す子どもに発言する勇気が欠けるなら、すぐそばでしりごみする前にささえて勇気を出させる必要もあろうと思う。そこで話すことの教育についていろいろ考えるとき、根本的な指導計画などの問題もさることながら、自由になんでも話してよい時間、自由な話を聞く時間というの

を毎日一定時、設定してみてはどうだろうか。

こんなことを考えているとき、ハワイで二世や三世の子どもを集めて、日本語の指導をしている、日本語学校の先生に会った。そこでは読み、かく教育もするそうであるが、聞く・話すことが基本におかれているようで、はじめは一語文からおぼえて、はなして、なおしてもらって、という形で指導していたそうである。しかし、いろいろやってみて日本語の全然わからない子どもたちが一番気もちよく教師の指導についてくるのは、自由な会話の時間であるということであった。日本の幼児たちは全然日本語をしらないわけではないから、自由な会話のたのしさをもっと身にいっぱい感じとる。そこでの聞き手は教師であり、話し手も教師である。心に秘めている指導の鍵を適切に使うならひとりひとりへのきめこまかい指導をおこなうことができる。ときに幼児同志の短かい時間ではあっても会話に発展することもあろう。教師の助けや指導で子どもたち同志の会話もそこから育つのではないだろうか。

○教材の系統化についてこれからの問題

さきにものべたけれども、幼児の発達の状態を精査に観察したり、またそれにもとづいて教材を云々したりする研究が少ないことはまことに残念なことである。とくに言語教育の面に限らぬけれど、教材を系統的に配列することができたらどんなに指導が楽であろうか。しかし反面、これとはちがった次元では教材も分類されている。たとえばいわゆるお話も子どもの情操をゆたかにする話とか道徳的な教えを含んだいわゆる生活ばなしというように、親や教師が子どもに培いたいと思う面を強調して分類し系統づけた研究もないわけではない。しかしどうも私はそれらをみていて、与えられる子どもそのものの、存在が無視されているように思われてしかたがない。教師が情操を豊かにと思って話す話も、子どもの頭に「現実と遠いな」とのこったなら、一片の感傷もわかないだろうし、はじめの目標は達せられないで終る。またそれだけでなく、自家のテレビならチャンネルを切りかえて楽しみ多いものにとりかえられもするが、つまらないなともしうってもそこに坐って聞かねばならぬとしたら、子どもはその時間を無為にすごすだけでなく、「話を聞き流す」術をも体得し、必要なことのときもあるいは聞き流すかもしれない。

かれこれ考えると、先生の話す童話を聞く、とあるあの教育内容を生かして指導するには、童話の構造についての研究とともに、幼児の思考や興味との関連をしらべて、童話について、年令別に系列づけるための目安をたてる必要があると思われる。

大正年間に波多野勤子氏が「童話の構造」について論文を発表されており、最近はまた、童話作家の立場で、むかしばなしの構造に考察を加えられた石井桃子氏の研究もあり、一部にその機運があるが、幼児がどううけとるかを問題にする場合、この解決の衝にあたるのは私たちではないかと思う。今後の研究の課題としていきたい

ところのひとつである。このことが橋頭堡となってその他の聞く、話す指導の鍵がつぎつぎ私たちのものになると期待するのである。

次に同様のことが絵本についてもいえる。この頃絵本が〇才向と称して年令別に編集されるのがはやっている。しかしそこにはたしかなうらづけがあるだろうか。どうもこの辺に私なりに疑問をもっている。

その絵本を見て子どもが喜こんで、あるいは、この絵本で何を具体的に覚えたなどのようないわゆる意識の表面の問題、目先の効果におわれて本質的なものの追求を怠ってはいないだろうか。もっとつっこんでいうなら、どのページにもついている—おかあ様方へ—という欄とか、附録の母親向けのページにもみられるように、子どもをたねにした母親の本のような気もする。そんな言い方は言いすぎかもしれない。しかし子どもの心の底の感覚、生命の豊かさに、どれだけ働きかけて、どれだけ効果があったかということはあまり聞かない。この面の研究の成果が絵本づくりに役立ったなら、どんなにすばらしいことだろう。

これらをだんだん考えてくると、幼児にむく絵をかいてくれる人、幼児にむく話をかいてくれる人というように幼児専門職の人がいないのも、聞かないのかもしれないが、淋しい気がする。

広い視野に立ちながら幼児を愛し育てることに情熱をもつ人が、絵本つくりに専念してもらえるということはいつの日にか実現してほしいことである。そのためにも幼児の側に立った教材の系統化を何からでも手がけなければならないと思う。

○幼児の能力評価のむずかしさ

幼児の能力は何の面についてでも評価し数値にあらわすのに困難がある。個人調査でなければできないわずらわしさ、雲の如くつかみどころなくいつも一定した形のない幼児の御機嫌のおもむくところで数値がかわってしまうむずかしさ、すべての能力が綜合した形であらわれてくるので要素的にとり出すことのむずかしさ、などなどいろいろある。

ことに、話す・聞くことについての調査となれば更にむずかしくなる。時間とともに流れ去ってしまうものをなんとかつかまえなければならないから大へんである。

しかしこれは是非やらねばならぬしごとのひとつである。しかも「言語」の指導に役立つようにまとめていかねばならない。いままでにも語いの発達などの調査はあるが、現在の時点に立っていないことと指導に役立てるように調べていないことが欠点である。

なんとか現場の人が手をあわせ、学者の方々の力をかりて、指導の観点にあわせて見本的な尺度をつくるまでにもっていきたいものである。

意あまってことば足らず、思うように、歯切れよくまとまりませんでしたが、同好の志の御批判御指導をうけたいと思います。

（東京学芸大学附属竹早小学校）

「自然」領域指導の問題点

大場牧夫

領域「自然」は、その指導実践においていろいろと問題を残している領域である。

昨今「科学性をのばす保育」が検討されたり、小学校の理科教育との関連性の問題が研究されてきたが、とくに今般の幼稚園教育要領の改訂にともない「自然」のねらいと内容について、それをどう受けとめ具体的にどのような指導をしたらよいのか研究することがますます必要になってきた。

しかしここで「自然」の指導はこうあるべきであるというような結論めいた意見をのべることを避け、「実践」する場合にどのような考えかたをしていったらいいのか、一つの考えかたを提案してみたい。

▽領域「自然」でねらうこと

旧教育要領にもとづく「自然」の指導書の第一章に「自然」の指導の重要性として三つの観点を述べている。

一、豊かな人間性を養う
二、科学性の芽ばえをつちかう
三、生活に適応する

これら三つの観点は「自然」の指導を考える観点としては重要であって、新教育要領における「自然」のありかたを検討する場合にも基本的な視点となっているといえる。

新教育要領に示された

一、身近な動植物を愛護し、自然に親しむ
二、身近な自然の事象などに興味や関心をもち、自分で見たり考えたり扱ったりしようとする
三、日常生活に適応するために必要な簡単な技能を身につける

四、数量や図形などについての興味や関心をもつようになる

の四つのねらいは、前述の三視点から生じたものと考えてもいいだろう。

△動植物への愛護心と　自然に親しむこと

従来の「自然」の指導は、もっぱら　動植物への愛護心と、自然に親しむことに重点がおかれ、そのことと「科学性」を育てることが混同されて指導されてきたところに問題があった。

科学性の芽生えをつちかうことと、愛護心を育てることは別な質のものであり、はっきり区別して指導していくべきであるという批判的意見が科学教育論として出されたことに注意しなければならないだろう。

それでは愛護心とか、親しみ、そして豊かな人間性を養うことをどのように位置づけて考えたらよいだろうか。

まず対象となる事物や事象については

(1)動植物の生活と成長

(2)地表上の事象　―山・川・海・など―

(3)大気中の事象　―雲・雨・雪・雷など―

(4)宇宙の事象　―大陽・月・星・夜など―が挙げられる。

これらの事物や事象に接する場合に、

(1)感動をもって受けとめる

(2)喜びを感ずる

(3)愛情をもつ

など、幼児の受けとめ方のありかたについて考えることができるが、これらのいずれにせよ、幼児の感情や感覚に直接的にふれることを大切にしなければならないことは当然だろう。とくに「感動をもって受けとめる」ということは一番大切であり、簡単なようで教育技術的にはたいへんむずかしいことである。

教育の理論が先行しても「感動をもって受けとめる」ようにはできないし、さりとて演出過剰でも教育的意図が見失なわれてしまう。そこでなんらかの手だてを考えなければならない。

(1)幼児の生活環境の中で「自然」の対象となるものを確認する

(2)幼児の生活環境を指導的再構成してみる

(3)経験の機会や場を設定し有効に利用する

例えば幼稚園とその園児たちの身近かな環境には、いつ頃、どのような植物が花を咲かしているか、おおよその調査はしておくというようなことで、ちょっとした機会に幼児がそれに気づいた場合にも、準備体制があると適切な指導ができるし、また、意図的に接する機会をつくることもできる。

お天気調べ表や継続観察表はつくったりする場合があっても、このような対象の調査をしてある幼稚園は少ない。

次に、どのような対象を教材として選ぶか問題にしなければなら

ない。

例えば、動物にしても、幼児が手でふれられる動物や幼児の愛情に反応を示すもの、などその種類を考慮すべきだ。手もふれられない、せわもさせないような小鳥をただ飼っておくことが環境設定ではない。

また、指導については、口で説明的にすることよりも前に、まず指導者が感動をもって事象を受けとめる、幼児とともに目を見開くことが必要であろう。

たとえば、海岸に遠足にいって「海は広いですね　よく見てごらんなさい　遠くに舟が見えるでしょう」ではなくて、「わあ―広いな―」のひと声の方が効果があることに気がつかなければならない。

自然の偉大さ

生きることのすばらしさ

をまず、直感的に感動をもって受けとめさせることを考えなければならない。

△科学性の芽生え

感動をもって受けとめることから、さらに深い観察と思考が生れてくる。

科学性を論ずる場合に「科学性」を「想像力」と対比的に、考えないで「科学性」をつちかう礎地としての「想像力」や「空想力」を考えていくべきであろう。

幼児のもつ　夢の世界、空想力　を否定して、おとなの論理的な思考をおしつけるのが「科学性」の指導ではないだろう。

科学の発展は、人間のたゆまぬ想像力によって支えられている。幼児の想像から、いろいろな事象にたちむかう態度や能力が生じてくるのであって、科学性の芽生えは、その事象への探究心の芽生えを大切にすることであろう。

そこで科学性の芽生えを次の三つの段階で考えてみよう。

(1)存在の発見あるいは確認――（なーに）――

(2)疑問の発生――（なぜ・どうして）――

(3)問題解決への試み

動物・植物・物理化学・地表上・気象・天体・それぞれの事象に対して、このような段階の経験を充分にすることが必要である。

そのためには

(1)これらの行動が生じやすい場を設定すること

(2)機会をとらえ、機会をつくること

(3)幼児の実態――感情・感覚・思考――を把握すること

(4)幼児自身による問題解決を大切にするために、指導者がなるべく結論を与えない方法をとること

(5)とくに解決への試みが充分できるような材料　――（虫めがねのような用具類、図鑑のような参考図書、そのほか種々の素材）

を準備しておくこと

などを考慮しなければならないだろう。

とくに、物の性質、光、熱、電気、などのいわゆる物理学的事象については、これをどのようにとりあげるかむずかしいが、決して物理の実験をすることではない。すでに幼児のあそびや造形活動の中で、彼らが立派にこれらの事象に対応していることを教師が確認することが先決であろう。

例えば、紙飛行機によって飛ぶ形が工夫されているが、これは流体力学に匹敵する。

砂場でのダムつくり、水あそびなどで、物の性質を知る。

これらの事象に無意識的に接していることを意識化することがまず必要である。

とくにいたずらのような禁じられやすい幼児の行動に、たまたま科学性の芽があることに注意しなければならないだろう。

△科学的認識を支える諸概念の形成

いままでのべた諸事象へのふれあいについてはいずれの場合にも、幼児の「思考」ときり離して考えることはできない

そしてまた「思考」によって深められる「認識」は、そこに幼児の実態としての諸概念と、指導としての概念形成を考えることができよう。

数量概念・図形概念・空間概念（位置・方位）・時間概念などは、ともすると「見かけの実態」によってまどわされることがある。

例えば数量概念についていえば、数がかぞえられる、数字が読み書きできる、ということで数概念と思いこむ。

「東」「西」ということばを口に出せば、方位概念があると思う場合が多い。

ただ単にことばを知っているということが、そのことばに関した概念の形成と見るのは誤りである。

数量概念にしてみれば、分離量・連続量の二つの量、直感、直接・間接、計量の比較の段階など、むしろ見かけの概念をうちこわして、再認識することが必要である。

大小・高低・遅速・前後左右・時刻　などなどのことばを、言語領域より自然領域に移項したゆえんは、言語と思考の結びつきから、科学的思考をのばすための正しいことばの概念形成をねらったからであろう。

新しい自然領域の指導は、単なる理化学・生物学のための科学性教育ではない。むしろ広い意味の科学的思考・科学的認識への芽生えをそだてることにある。そのためには、幼児教育を幼教育科学として打ちたてるようにしていくことを考えなければならないだろう。

（桐朋学園幼稚園）

「音楽リズム」の領域について

安藤寿美江

一、教育内容と目標のたて方

従来の教育要領では、教育内容を〝望ましい経験〟として、四つの柱（歌を歌う・歌曲をきく・楽器をひく・動きのリズムで表現する）に分けて示してあった。新教育要領ではやはり四つの柱ではあるが、これが〝ねらい〟として示され、内容のくくり方も多少変り次のようになったことは既にご承知の通りである。

1　のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう。
2　のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう。
3　音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ。
4　感じたこと考えたことなどを音や動きに表現しようとする。

以上の四つであるが、これを要約すると、

1・2 ―― 表現
3 ―― 鑑賞
4 ―― 創作

ということになる。内容としての事項に幾分の加除訂正はあったが、基本的なものに大きな変動はないにもかかわらずこうしたくくり方の改訂は、形式において小学校との関連性をとったと考えてよいであろう。しかし、ここでことわっておきたいのは、とくに創作的表現だけをとり出して行なうというのではなく、実際には従来通り歌うこと、ひくこと、動きのリズムのそれぞれの表現活動の発展として行なわれるということである。

二、表現の内容について

1「のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう」ねらいに関して

のびのびとという表現は新要領の各所に使われていることばである。幼児が明かるく、楽しく、活動できるような解放感を与えることを意味している。表現活動においてはとくにこのことが重要で、こうしたふん囲気でこそ初めて幼児の積極的な表現活動が促がされ興味の中に、音楽についての基礎的な技能や感覚が表われるのである。しかし、実際にはのびのびとした活動を行なわせようとすると自由奔放になり、さわがしくなってそのねらいが達しにくくなりやすい。ここに、幼児の実態把握や音楽的教養など教師の高度の指導技術が要求されることになる。

(3)すなおな声、はっきりしたことばで音程やリズムに気をつけて歌う

歌うことの基礎的技能の指導の必要なことをはっきり示している。生活に即し、ただ漠然とくりかえし歌わせていては発展性がないし、音楽愛好の気持も育たないであろう。しかしこれらの指導は最初の大きなねらいではっきり示しているように幼児が親しみやすく歌いやすい歌をとりあげ、のびのびとした楽しいふん囲気の中で歌うことの喜びを味わせながら、あせらず徐々に指導していくようにすることを忘れてはならない。

(5)曲の速度や強弱に気をつけて楽器をひく。

曲の速度や強弱に注意することはやはり前項(3)と同様、楽器遊びの基礎的指導であり、同時に他の分野（歌うこと・動きのリズム・きくこと）にも必要なことである。また、これらの基礎的指導は発達に応じ、先ず楽器に親しむことから始めて、拍子打ち、リズム打ち、分担奏、合奏と、発展する指導と合わせて行なわれるように心がけることがだいじである。

2「のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう」ねらいに関して

(1)のびのびと歩いたり、走ったり、とんだりなどして、リズミカルな動きを楽しむ

この事項は前要領にはなかったものである。

幼児のリズミカルな動きの中には必ずしも音楽や打楽器のリスムに合わせたものばかりとは限らない。ただ歩くこと、走ること、スキップすること自体にリズムを感じそれを楽しむ場合がある。従来、動きのリズムといえば歌や曲に合わせて行なうことと限定したせまい見方をする人が多かったようである。動きのリズムは必ずしも音楽に付追したものばかりではなく、動き自体のものもあること、そしてこうした面もまた育っていかなければならないことをこの事項で示しているわけである。

(6)リズミカルな集団遊びを楽しむ

この事項も前要領にはなかったものであるが実際には行なわれていた内容である。わらべ歌による〝かごめかごめ〟や〝あぶくたった〟、曲によるフォークダンスなどがこれである。こうした集団で

行なう単純なリズミカルな動きを通して、幼児たちの生活を楽しむ態度や社交性が養なわれていくのである。しかし、従来はとかく軽視されたり、或いはこれのみに片よったりのきらいがあったように思われる。これもねらいをはっきりおさえ動きのリスムの一面として指導すべき分野である。

(7)友だちのリズミカルな動きを見て楽しむ。

前項と同様、新しく加えられた事項であるが、すでに現場では、おたん生会、子ども会、学芸会などや日常の保育の中で行なわれていたことである。動きのリズムの鑑賞であり、時には批判である

但し、幼児の場合、これはよほどその発達に応じた取り扱いが行なわれないと逆効果になり易い。とくに日常の保育の中で行なわれる場合に問題があるように思われる。男女別やいくつかのグループで交互に行なう場合、とかく、交代のグループ数が多かったり、交代の時間が長かったりして幼児の注意の限度を越えるための問題が多い。またどんな点に気をつけて友だちの動きを見るかの目的指示や或いは友だちのを見ながらその動きに合わせてリズム楽器をたたいたり、歌を歌ったりというような活動をさせるような待つ子どもへの行きとどいた配慮に欠けやすい点である。なおみたあとの話し合いてはとかく友たちのあらさがしにならぬよう、お互いによい点を見出そうとする好ましい態度を育てるよう心がけたいものである。

三、〝鑑賞〟の内容について

3「音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ」ねらいに関して

(2)静かに音楽を聞く。

幼児なりに静かに聞くこともできるという意味でおとなと同じように眼をとじ静止して長時間鑑賞するというような高度な態度を要求するものではない。(1)の喜んで聞く段階の発展的なものであるが、この場合でも友だちに迷惑にならない程度に頭をふったり、手をふったりなどして音楽に反応しながら聞く程度のことは幼児の段階としてしぜんである。こうしたことまで押えようとするのではない。

(3)いろいろのすぐれた音楽に親しむ。

このいろいろのすぐれた音楽の中には、いろいろの曲想のもの、いろいろの楽器の音楽（リズム楽器、管楽器、弦楽器など）、いろいろの演奏形態（独唱、斉唱、輪唱、合唱、独奏、合奏など）、その他いろいろの調子、拍子、リズム、旋律、和音、および古いもの、新しいものなどがふくまれる。これらのうちからすぐれたものをえらひ広くゆたかな音楽的経験をさせるように考えなければならない。教師の好みによって偏することのないように留意することはいうまでもない。

(6)日常生活において音楽に親しむ。

生活の合図としてすぐれた音楽を流している園がある。これはこの事項のねらいが具体化された一例であろう。幼児は集合の合図、食事の合図などとして毎日くりかえし名曲を聞くうちにしだいに親しみを持ち、そのメロテーさえもはずさむようになる。また、自由遊びの時に、数人の幼児がレコートプレヤーを囲み、楽しそうに音

楽を聞いたり、それに合わせておどったりしている情景を見かけることがある。こうした望ましい環境への配慮があってこそ音楽愛好の精神は育つのであろうと思われる。

四、〝創造的表現〟の内容について

4「感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする」ねらいに関して

(1)短い旋律を即興的に歌う。

(2)知っている旋律に自由にことばをつけて歌う。

(1)は作曲、(2)は作詩への萌芽である。幼児のこうした望ましい活動を単なるでたらめとして見過していることはないであろうか。また、「さあ、好きな節で歌いなさい。」「これから、知っている節に好きなことばをつけて歌いましょう。」などと改まって指導をしようとするようなことはないであろうか。いずれも望ましい指導でないことはいうまでもない。幼児は本当にのびのびとした自由な楽しい時におのずから即興的な歌を歌うものである。教師は遊びの中でこうした活動を見のがさず、ほめたり、はげましたりして自信をもたせ、その芽生えを育てるようにしたい。改たまった堅苦しいふん囲気の中で、創造的な活動を強いるようなおろかなことはしないようにしたいものである。

(5)友だちといっしょに感じたこと、考えたことをくふうして歌や楽器やからだで表現する。

この事項はグループでの創造的活動をねらい、実際には行なわれながら新要領で初めてとりあげられたものである。問題点としてはとりあげ方や指導が散発的であり、思いつきで、指導計画への位置づけや、段階的な教えや指導に欠ける傾向のあることである。グループ活動にしても、創造的活動にしても年少児には無理であるという考えをもつひとがある。そのため年長児になって一挙にこうした活動に追いこみ、その効果のあがらないことをなげくということになりがちである。ここに根本的に考え方のちがいがある。年少組の一学期でもそれなりにふさわしい創造的活動、グループ活動であるはずである。初めはごく断片的、部分的なことから導入し、それを二学期、三学期、年長組と進むにつれて徐々に発展させていくのである。幼児教育に促成栽培はおよそ不可能であり、禁物である。例えば動きのリズムについて考えても、初めはみんなで同じことをして楽しむことから、単独でくふうして表現することに導入し、それから、ふたり組で一方のすることを他がまねるような遊びからふたりでひとつのことを表現するというように導き、やがてそれが数人にまで発展するよう段階を追って漸次指導されることが望ましい。そしていつごろどの段階の指導をしたらよいかは幼児の実態や保育年数に応じて指導の計画をたてるべきである。

（東京都教育委員会指導主事）

＊　＊

幼稚園の一年間

お茶の水女子大学附属幼稚園

たのしい一日

村田修子

幼児と生活していると、一年というものがまたたく間に過ぎてしまう。常に新らしい為の幸とでもいうのだろうが、それだけにその成長の変化が一緒にいるものにはつかみにくい。写真などをみて改めて驚くということになる。

そこでこの一年間のようすをふりかえってみると共に、或る時期のたのしくすごせた日々のことを思い出してみたい。

○三才児のすがた

はじめて幼稚園にきた日、へやに入ってきて私に名前を呼びかけられると〝おやっ、どうして知っているのかしら〟〝おやっ、ぼくを知っている人がいるぞ〟と不思議そうに目をきょろきょろさせたり、にこっと笑ったり、恥かしそうにだまりこんでしまったり、いっしょうけんめいに教えられた返事をしたり、目いっぱいに警戒心をみなぎらせてにらみつけていた人たちが、だんだんに友達の名前を覚えたり、幼稚園の環境とか、その動きやようすなどをのみこんでくると、今まで警戒するために着ていたベールをぬぎすてて、おもちゃのとりあいなどのけんかも始まり、本来の姿を出してくる。

この時期は大体五月のはじめ頃にやってくる。今までスムースにはこんでいたことすべてがうまくいかなくなり、たいへんに扱いにくくなり、またたいへんにいそがしくなる。先生にとってむずかしいばかりでなく、子どもの側からいっても危機といえる。

その原因は先ず第一に、初めての集団生活に多かれ少なかれ緊張して過しているためにつかれが出てきた、ということ。次に各々が本来の姿を出して思ったとおり勝手な活動をするので、したがってけんかなどが多くなり、自分の思う通りにならない人たちは、家で思うようにできる気軽さの方がなつかしくなり、幼稚園にくるのがめんどうくさい気持になるためである。

その頃のようすは、本当にあっという間にことがおきてしまう。たとえば、まっすぐあるいていった先に他の人がいれば邪魔なの

で、ドン、とつきとばしたり、〝あの人と遊ぼう〟と思うと、そばにいっていきなりボンと親愛の情をこめてたたいたり、自分が言おうと思っているのに隣の人が先に話し出したりすると相手の口をおさえてしまったりするし、やられた側はやりかえしたり泣き出したりするので計画などは中断されたりうまくはこばないときの方が多い。このようなことが再三になると、言ってきかせたり、文句の一つも言うことになるが、私のこわいかおとは関係なく、可愛いいようすで〝せんせい、どうしたの〟とか、全然関連のない〝昨日パパがおみやげを買ってきてくれたのよ〟ということになると、改めて三才児だったことを思い出し、おとなげない自分の姿に苦笑してしまうのである。

このけんかも六月の後半頃から幾分やわらかみを帯び、衝動的・突発的ではなくなって意見の相違がだんだんに盛り上っていって遂にはけんかになる、というようにかわってくる。それにお互がそれぞれの持ち味やくせ、傾向などを幾らか知ってくるので、けんかになる前に相手によってはよけてしまったり、いいあうだけで終りになったり、片方が妥協していくのでかえって遊びがおもしろく発展したり、ぐっとこらえてしまう、というようにそのはこびが直線的でなくなってくる。

けんか一つを考えてみても、このように進歩が目にみえるほどであるから、まして生活全般にこのことがいえる。

こうなった時に迎える夏休みは楽しいというより最初は心配なことらしい。〝どうして幼稚園にいかないのか〟〝自分だけいかないのではないだろうか〟と。夏休みの初めの日、お母さんといっしょにたしかめにくる人がよくある。きてみて昨日と違った活気のない園内のようすでやっとなっとくする。

このように友達とのつながりができて、一人よりも友達と遊ぶことのほうがおもしろくなってきて幾分じょうずに遊べるようになるという変化は一大転機といえる。この大切なことをうまく身につけさせるのを主眼としたのが一学期である。

だからその大切な目標に達するべく六つの領域に含まれることを内容として進んでいくが、常に「たのしく」ということが一番もとなる。

そこで、日増しに成長発達してきて集団の中でのすごし方などが身につき、すべてが軌道にのった二学期、三学期については、「たのしかった日」についてあげてみたい。

○たのしかった日

「たのしかった」と感じるのが子どもの立場から考えたときと、おとなの側から考えたときなどいろいろあるが、ここでは計画していなかったことが何かをきっかけとしてどんどんと発展し、それにひたりきってたのしく遊んだ本当に数えるほどしかない日のことを書いてみたい。

写真屋さんあそび

二学期の或る日　実習生が空箱と色セロファンを使って写真機を作る計画をたてた。子どもたちは材料をみただけでセロファンを通して明るい方を見たり、二枚重ねたり、違う色を重ねて見ては驚いていた。三才児はこれでもう充分にいろいろな経験をしているわけであるが、「写真屋さん、うつして下さい」とか「今のはカラーですか　白黒ですか」A「カラーです」といっているうちに、へやの外へまでうつしにあるく人や、一隅におみせやさんの台とか椅子で店をつくり始めた。そ

できあがった写真〝せんせいのかお〟

ここで「こんにちわ、うつして下さい」とその中に入りうつしてもらうと白い紙をくれるので、「先生はいまお顔をうつしてもらったのですが、うつらなかったのですか」というとA「ちょっとお待ち下さい」ということになり、今まで人の顔など書いたことのない人、書く人がすきでない人までみんなが人らしいものを書いて「おまちどうさま」と持ってくる。この遊びはたしかに程度が高いが、案外これをおもしろがって全員が参加して一時間以上も続けられた。この遊びはその日を山としてそのあと二日つづけられた。

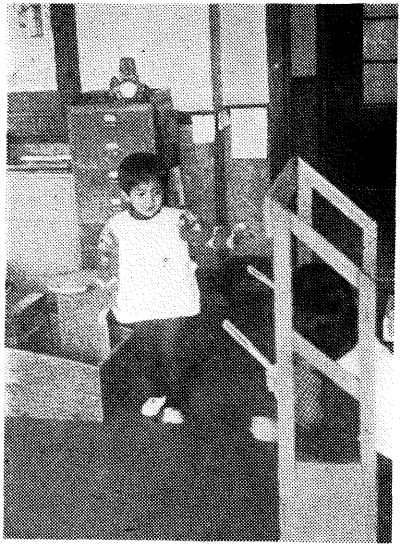
三学期の初めにしまっておいたこの写真機を一人がみつけたのをきっかけにして、前と同じような遊びが自然にくりひろげられた。

三月上旬に今度は私の方でこの遊びに持っていこうと計画した。場所を作り環境を整え、働きかけをしてみたが、その日はなかなかそれにのってこないで、しつらえた場所は鉄人ごっこの家にされたにすぎず計画は完全に無視されてしまった。

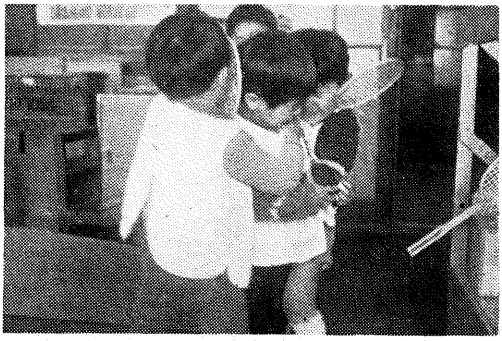
むずかしい程度の高い遊びも、持っていき方によっては無理なくやることができるが、その反面、自分たちで遊びをみつけて自由に遊べるようになると、前と何のつながりもない計画とか、その年令にあわないものは子どもの興味をひきつけるのがむずかしいことを今更のように感じさせられた。

鉄人ごっこ

それにかわりその日は鉄人ごっこが始まった。一人が片手の指先にビニールのカラーテープをはりつけて怪物になって他の人を驚かせてあるいたのをきっかけに、われもわれも



鉄人がやってきた



みんなで鉄人をやっつけろ

みんなで鉄人になろう

と机の前でその作業が始められた。その時は本当に自然の姿でひき出しからはさみを持ってきて友達同志で「その色かして」「この色のいる人」というようにスムースにはこび、また、どうしたらこわくみえるか、といろいろくふうして殆んどの人がこわいものになり、暫くおいかけたり追われたりして遊び、それがすむと、「もう鉄人ごっこやめた」と屑入れの前でその爪をとっていた。その間、殆んど私の入る余地がないように、一日が自分たちの計画のもとによどみなく流れ、しかも内容的には製作・社会・言語といえる経験

こわい鉄人なんだぞ

もうおしまい

がちゃんと盛り込まれているのである。このときの「ああいうようにしよう」という意欲に溢れた顔つきは忘れることができないほどいきいきとしていた。

○劇あそび

もう一つ、組全体が物語り遊びの気運に向いていた三月の初め頃、全員でその遊びが始まった。子ども同志の話し合いが「七匹の子羊」だった為、子どもではなり手のない狼に私がひっぱり出された。狼が池に落ちてあやまるまでを三回ぐらい続けてやりかえし、まだまだ続きそうなので、とうとうやりきれなくなって「みんなはあとどういう話しを知っているの」というようにもちかけ、狼の出てこない話しの劇をするように方向づけたところジャングルジムをこびとの家として、白雪姫ごっこが始まった。みていると自分たちで数多い役割を長い時間かかってきめ、一度すむとかわりあって何度も同じことを繰り返して二時間近くも続けられた。その間やはり私の入る余地はなく、ただ近くにきた人に「どうなりましたか」「あなたは今何ですか」と聞くぐらいであった。

教師がいくら綿密な計画をたてても、このように全員をひきつけることはなかなかできない。子どもの中から、やろう、という気の出てきたものはそこで年令相応の指導をちょっとすればどんどんと発展し、楽しみながら思わぬ成果をあげることができることを、このことごとによって改めて認識することができた。

これから考えても、幼児は、特に三才児は無理に計画にはめこんで引っ張っていくよりも、その裏にある教師の計画が幼児には分らぬように難なく自然な活動の中に生きていくようにすることと、自然に発生した事柄の中に指導すべき面を見出して、適切な処置のとれる柔軟性の大切さをひしひしと感じた。

・どんなものでもたのしく遊ぶ道具になる

〝よいしょ〟と低鉄棒のできないおともだちのおてつだい

ふりかえった四才児の一年間

堀合文子

三月の終業式をおえて、一年ふり返ってみた時、ある満足感と、ある後悔が入り乱れる。

四才児は、幼児自体も心身共にぐっと成長する時期であり、将来への基盤がこの年令の時、つくられなければならなく、団体生活からみてまた、個人生活からみても、正しいそのルートにのせてあげなければならない時期であるので、幼稚園生活三年の中では、一番むずかしく、やりにくく、またおもしろく、そして大切である。三才児十五名の生活へ二十名の新顔を加え、自分の気持の緊張感と胸を走ったあのファイトが今でも思い出される。

一年間の幼児の特別な状態を、或る時は幼児の発達状態の段階ともなるが、その中より数種とりあげ、その時の自分の頭の中に考えた事、実行した行動、処置を時期をおって一年間振り返ってみよう。

泣く子、親と離れない子、遊べない子が予想どおり数人いた。

●四月には例年経験することだから、覚悟と言おうか予想と言おうか、一応予期したことだが、長年経験していても胸がどきどきしてしまう。

●朝むかえる時のタイミングを特に考えた。部屋へきた時、たよるべき人が姿をみせないことは、母親にかわる私共の立場を考え、三十五人いれば三十五人の幼稚園での母親であるつもりで対処しないといけない。むかえる教師の態度は三才児の時と同じだった。（否これからもだ。）

●生活の中では、泣く子、不安げな子、遊べない子は終始、注意をはらい、話しかけたり、手をつないだり、自分の側にいつもおいたり、用事の時は必ずその事をはっきりしらせておくなど注意し、不安にならないよう、泣かせないように特にとくに配慮し、努力した。

●遊ぶ事に対しては、この四月だけの問題でなく常にこれは幼稚園生活には大切な事で教師が共にあそび一日も早く友だち関係ができるようにまた日が進めばその遊びの中で経験すると共に、生活習慣づけやその他の社会性の面も考え、あそびを指導するようにし、遊んでいる時は個々の幼児の顔色、気持を常にくみとっているようこの時期には特に留意した。

一年経験して来た人が、却ってべそをかいたり泣いたりした。

●おやおやと驚くと共に自分を反省した。どちらかと言えば三才児の一年間を経験した人は、あそぶことを始めとして種々の点私としても安心感があったので新入園児に心がうばわれていた。幼児は敏感だ。何か不安を感

じたのだ。

●勿論、前と環境がいろいろとちがうのは当然だし私もそれは考えていたが、改めて環境を考えなおしてみた時、部屋全体に机と椅子がところせましと一ぱい。今までは十五名の幼児のための部屋が広々としていた。そこに一つの圧迫感のようなものを感じたらしい。こんな事は些細な事だが、いろいろ変化した環境の中の一つでも取りのぞけば気持の上で少しはプラスになるかと、早速、机、椅子の配置をかえてみた。と同時に新入園児と同じ態度をとるよう留意した。

例によって例の如く、大分みんなも馴れてきて、離れない人もなくなり、或る程度何とかあそび始めたと思った頃、思わない人、今まで元気だった人が戸口でしょぼんとしたり、途中で泣きだしたり始めた。

●入園式後数日のあの忙しさから思うと日々にみんなが落ちついてきて、一日一日前進の状態になってきた。今まで泣いたり、くっついたりしていた人が何かの機会に友だちと遊んだり、にこにこしたりすると私もうれしくなると共にほっとした気持になったところへのできごとで私の気持にもはっとさせられたり、やっぱりまだまだ気を許してはとゆう自分の反省もした。

●案外手ごわくて、何を話しかけても首を振る。却って涙が多くなる。〝家へお電話して〟と約束して何とか帰りの時間までもたせた。次の日からはこんな人達も出さないよう。淋しさを味わせないようまた緊張が続く。

おべんとうが始まった。〝まあおぎょうぎがわるい〟とびっくりしたり、おかしくなったり。

●初めてのおべんとう。いろいろの習慣づけも大切と約束しながらいよいよおべんとうをはじめる。はじめはみなお行儀よくじょうずに食べ始める。私も一緒におべんとうをすませ、ちょっとかたづけがてら用事をしてと部屋を留守にした。帰ってきてみるとまあびっくり。ある男の子が、食事がすんで遊んでいる砂場の友だちをみながら、何と食後のバナナを立って食べている。驚くと共に純な姿に苦笑し、こんな人たちが次第に習慣づけられるたのしみを持ちながら注意した。

計画にあるので今日は製作でもしようと考える。やりはじめたはよいが、〝先生○○ちゃんが呼んでる〟〝先生○ちゃんがころんだ〟〝先生これどうするの〟〝先生手をまくって〟〝先生ちょっときてこんなものがある〟〝先生おにごっこしよう〟次々と用事どれもこれも満足してあげようと、とうとう仕事はできなかった。

●幼稚園で経験する経験は、幼児の生活である〝あそび〟の中の生活の中にいろいろ入れられてゆくが、先ず、幼児のあそびが正しくできるようにさせ友だち同志のあそびが正しくできるようにならないとその上に立ついろいろの経験はみんな崩れてしまう。また発達段階からみてもこの事は考えられる。教師も共にあそび友だちとのあそびを一日も早く正しいルートにのせる事が一応四才の一学期に考えなければならないことである事は十二分に知っているが、恥ずかしいことに周囲をながめて何か仕事をさせているのを見ると、やはりやらねばと自分の信念もぐらつきせっかく遊んでいる

幼児を引っぱって仕事をさせてみてしまう。五月の鯉のぼりをつくらなければとはじめたが、やりはじめると、〃先生〃〃先生〃〃先生〃〃先生〃と用事がおこる。その中には呼ばれなくても、砂場に水が一杯すぎてまた指導にゆかなければならぬし、仕事の指導どころでない。全部一斉に入れて指導すれば見たところは指導していますという事はわかるようだがこれを続けては決して幼児の創造性はのびない。しかたないからやるという人間ができてしまう。こんな事はいつも心の中、頭の中にある事だが〃でも〃という気持で実際にやり出すと、生活の発達段階といおうかその面からも幼児の方から〃今はだめですよ〃と教えてくれるような状勢だ。ああやっぱりこの時期にはやるべきでない。充分に友だち同志のあそびをやらせるべきだ。そして仕事などさせるよりもっと先にしなければならない大切なことをこのあそびの中に指導してゆかねばならないと今更のように自分の考えや信念に自身をもたせてくれた。そして〃先生〃〃先生〃と忙しいくらいの用事がうれしく、また張り切って三十五人の三十五種の指導をきりきりまいでしようと飛びまわった。

●或る日〃先生○ちゃんがけんかしているよ〃。たいへんとかけつけてみるとはなばなしいけんかをしていた。

●友だちの呼ぶ声にあわてていってみると、男の子が二人つかみ合いのけんかをしている。理由をきけばおもちゃをかしてくれないので暴力に出たので、お互につかみ合いになった。

●私は心の中で思った。「けんかをする位友だちたのもしくなった。けんかをする位友だち同志の関係ができてきたのだ。けんかをする位幼稚園に安定感を持ち自分というものを出してきてくれたのだ。自分というものを、よいも悪いも赤裸々に出してくれてこそこちらはありがたくその上でよいものはよい、悪いものは悪いと指導しなければならない。」と。

●二人の間を平和に解決して次の機会をまった。今の事を忘れたように二人はたのしそうに遊んでいる。私はまた二人のところへやって来て〃まあ、仲よくあそんでいるのね。えらくなったのね〃と一言。

●一学期の中でないとみられない一こまだった。

あそび道具のかたづけはとてもじょうずになった。細いブロックを私がざくっと箱に入れようとしたらあべこべにたしなめられてしまった。

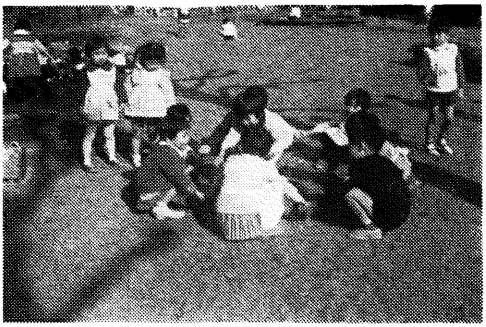
●遊具のかたづけは最初から指導しなければならない生活指導の一つだ。やりなさいやりなさいと口で言うより、教師が率先してかたづけ幼児に手伝ってもらうところからはじめ教師が身を持って指導してゆかねばならぬ。そのうちはじめだけルートをつけてあげると幼児だけでかたづけられるようになった。新しくブロックを積木のところへ加えた。これはかたづけがたいへんなので箱をきめて入れればと思っていたところ、何と〃先生だめだよ　こうしてゆるくはめていけばいいんだよ〃とのことば。恥ずかしくなった。きつくはめればとれなくなるからゆるくはめてつなげる。床にぺたりとすわってたのしんでかたづけている。

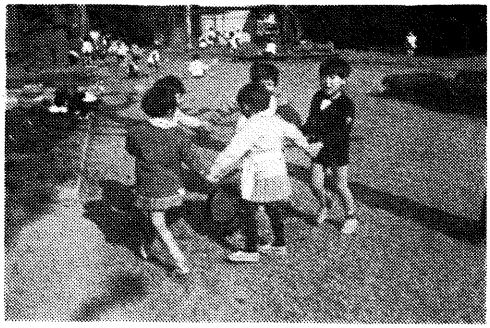
●二学期の終りころから今度は色別にしたりして、かたづける事において幼児はそこにも

工夫と創造力を働かせて、もうここまでくると、かたづけが幼児の生活の一部、あそびの一つに変化している。口には出さないが、私の心もうれしくなる。〃なんてみんなかたづけがじょうずなのでしょう〃真の心の感服が口をついてでた。幼児は得意そうでたのしそうだった。

食事の後かたづけをしながら窓からみると、私が遊んであげたとおり遊んでいた。

うしろのしょうめんだあれ





●先生木鬼しましょう。かけっこしましょう。と二人も三人もあってもたりない位ひっぱりだこ。

まだ友だちがない人ぽつんとしている人の手を引っぱってかけっこをしたり、鬼ごっこしたり、あぶくたったしたり、砂場遊びをしたり。

●みんなのたのしそうにあそぶ顔をみると帰る時間がきてもあともう少しあと少しは大丈夫と私の方が時間をのばしてしまう。

●何か用事のためにたまに〃林のくみお入り——〃と呼び入れると、はーはー息を切らし顔を紅潮させながら〃先生もうお帰り？〃。林のくみーと呼ばれれば必ずお帰りと最近は反射運動的になっているのも苦笑してしまう。

●お盆を洗いながらふとみるとこの間遊んであげた遊びをそのまま友だち同志でやっている。

一人ぽつんとしていた人もメンバーの一人。先生あそびましょう。先生入ってときた日。一緒に遊んであげたその事が実をむすんだようでうれしかった。四才児は教師が誘導してゆく事で一歩一歩前進してゆく。ほっておいても年令が進めばできるが指導したのと放っているのとはその遊び、幼児の進歩が目にみえぬ中に差を開いていく。こんな日が

来ると目にみえない努力もむくいられたようでうれしい。

運動会を機会にリレーの大はやり。

●運動会をひかえて、かけっこしたり、リレーをしたりしてあそぶ。大きい組の人がリレーをしたのが魅力らしい。

●その後は毎日毎日男の人全部が参加しておいた。

鉄人二十八号

山を一まわりのリレーごっこ。静かにあそんでいた人も参加していることはうれしかった。

●あまり毎日毎日やったためか朝おかあさまが、〃今日は脚がいたいと申します〃と報告があるのには苦笑した。

●今だにこのリレーは続いており、メンバーをかえ、冬になると場所を廊下に移し、スキップ競走などに変化して続いている。いつまで続くだろう。

テレビのまね

●五、六人のグループが固定してきて、このところ二学期の中頃になると、グループもきまり、遊びも、〃明日もこの続き〃と、数種のあそびが何週間かくりかえされる。そしてそのグループは次第に大きくなり、男は男、女は女の大きいグループに変化し、次に男の人と女の人が日によって、遊びによっては一緒になって組ほとんどがこれに参加してあそんでいる。

●このあそびの一つに、テレビの鉄腕アトム、鉄人二十八号のまねあそびがはやり出した。積木でも、ブロックでも、そしてまたお画かきもそして自分もそれになって夢中。人にわるいことをしたり危いことをしたりするのはやめる約束をして一応このあそびはみのがした。消極的な子が積極性を発揮してきた。無口の子がにこにこしてとても朗かに明るくなった。幼稚園がたのしくて、熱があっても休みたくなくてなどたのしい悲鳴もこの頃からはじまった。

●みんなが心身共に発達したようですべての事がたのしくファイトを持って生活しだした。

●おもしろい事に、仕事をあそびの中に入れても却って関心を持ちファイトを持って参加してくるのには私もおどろきと喜びを持ってみまもった。

つくるという事にも関心や興味を持ち、空箱を利用したり画用紙で作ったりして時折の作品がたまってきたので、相談しておもちゃやごっこをすることにした。

●友だち同志のあそびができてくると、次第に経験を広げ、画くことからつくる方へと興

味をむけてゆく計画を持つのが四才の二学期終り頃からでその一つの誘導としておもちゃやをよく主題にとるが、今の人達は二学期のおわりには計画を持ち出しても興味を示さず振りむく人が少なかったので充分に友だち同志のあそびをさせてからと、三学期にのばした。或る一部の人は興味を示しても、全員が少しの興味もなく参加しないと意味がないので、三学期の室内あそびを機会に計画を持ち出してみた。

おもちゃやごっこ

●これは成功で今までしごとには振りむきもしなかった人が夢中で考えたり作ったり二人で協同で作ったり。個人個人がそれぞれ自分たちのアイディアを生かそうとし、また私の方も生かしてあげようと思うのでその忙しいこと忙しいこと。AさんにはAさんの考えた事を相談にのったり助言したりして満足させてあげAさんにはAさんなりにという事で朝からやりかかってもすぐおべんとうの時間になってしまう位時間がたりない。

●〃こんなものはどう〃〃こうしたらどう〃と却って教えられるようなことも多々あり、むしろ私の方が引っぱられる形だった。

●今までの経験では、教師が誘導をじょうずにしないと、長い期日をかける主題はなかなかうまくゆかなかったが、こんどは私の方が引きまわされ、期日もたりなく、子どもたちのもり上りに満足を与えられなかったようで、今考えると私としても心残りな気がする。

●お店をつくって並べても〃相談して〃など待たず、自発的に値段がつけられ準備はでき、たのしく開店した。

レコードにあわせて自由に表現してあそぶ

●秋の運動会の時小学校の人が音楽行進をしたのをみて早速、積木・丸棒積木が楽器で、男女一しょに行進のまねとバトンガールのまねが始った。これもその当時、〃先生レコードかけて〃といってあそびの中によくくりかえされた。

●しばらくこれも忘れられた時、ままごとあそびの発展で〃お姉さんはバレーのおけいこ〃ということから、またレコードかけてと始り、音楽にあわせて自由に表現してあそぶ。

●そのうちままごとあそびが忘れられ、平常あまり活潑でない人、私の側にまだ時折くっついているような人が、ふとみるといっしょうけんめいおどっている。そしてその表現は、じょうず下手というより、いろいろの表現を次々とする。

●一人、リーダーのようにみえる子どもは事実バレーを習っているが、むしろ習っていない人たちの方がいろいろと表現を考え、たのしそうにそして真けんにやっていた。

●〝先生見にきて〟と私や他の友だちもお客さまにして〝そのうちおしばいもみせます〟といっていてもう一つのごっこあそびになっている。

●これが次の経験にゆくよい機会で、これをとらえて言語の方へ誘導してゆかなければならない。幼児の方が私の目標を知っているかのように次々と誘導の機会を提供してくれるようだ。

●しかし残念にも三学期はおわってしまった。

どうなることかと思案したことも折々あったが、こうして三学期になると、個々の幼児がたのしんで生活し、自分の力を個人なりに発揮していることは一つの満足だ。

或る時は困ったどうしよう、この頃はよくなったと波のようにうねりをつくりながら発達していくのが四才児だろう。反省も勿論たくさんあるが、この基盤の上に足りないところをおぎないながら五才児の生活に移行してゆかなければならない。一人ひとりの活力にみちた笑顔が浮かぶ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

予　告

幼児教育講習会

日　時　昭和 39 年 7 月 22（水）—25（土）日
午前の部　9.00—12.00
午後の部　1.00— 4.00

会　場　お茶の水女子大学講堂

主　催　お茶の水女子大学附属幼稚園内
日本幼稚園協会

五才児雑感

村井トミ

昨年の今頃のこと——

あの、よちよちしていた三才児が、またはこの間入園したと思った四才児が、いよいよ幼稚園の最年長組になった！　思えば、短くもあり、長くもあった二年、または一年であったが、幼稚園生活の最後の年となると何か心がときめき、希望があふれ、充実した生活をさせなくてはと、私もまた子どもと共に、新しいよろこびと情熱に顔を輝かせたことを思い出す——

年長組ともなると、子どもも、ぐんぐんと発達していくのが見える。過去二年、または一年の間経験してきた生活の上に、がっちりしたものが建てられていく感じである。走るにしても、とぶにしても、話すにしても、何をするにも、こちらも真剣にかからなければ負けそうな気がする。やりがいのある楽しさを感じさせる。それだけに、こちらもどういう指導をしたらよいかと責任を感じる。充実した生活を充分にさせてあげなくては——、幼稚園生活のまとめをしてあげなくては—と。

三才は三才なりに、四才は四才なりに、私の「ねらい」があった。「ねらい」というより「ねがい」ということばの方が適切かもしれなかったが——、私は五才のこの子たちに対する「私のねがい」を、次のようなことにしぼってみた。

○よく考え、よく工夫し、積極的にやってみる。

○友だちと協力して、たのしく仕事や、あそびができる。

○年長児らしく、優しい気持と責任感がもてる。

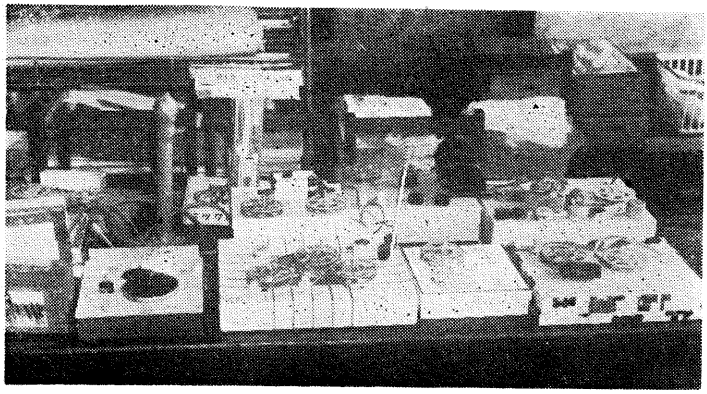
この三つのことと前後して、私としては一人ひとりの子どもをよく見つめて、一人ひとりをしっかりと指導していこうと決心した。

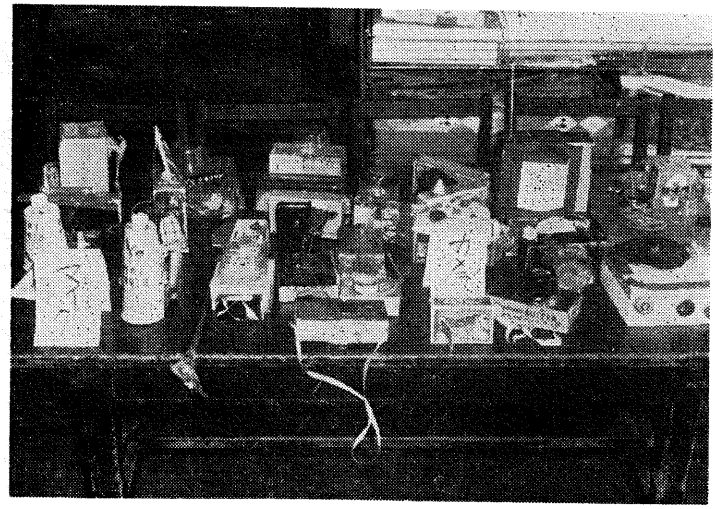
ここにあげた三つも、こうして書きならべてみると、たわいもないようだが、入園してから現在に至るまでのいろいろなこと——一人ひとりが充分にあそべることからはじまって、友だちと仲よく・自分のことはできるだけ自分で・素直に何でも言える・心から人の話をきける・何でも一生懸命にする・約束は守るなどの、土台の上におかれたものであり、また更にこれからも平行していかなければならないものでもあるのである。

年長組になったといっても、まだまだけんかも起ったし、女の子など友だちのより好みで、入れてあげたりあげなかったり、ままごとなど発展する程、道具の分配が問題をひき起したりであった。一人ひとりみつめると、臆病の子や、わがまま、いたずら、落ちつかないなど、いろいろと問題はいくらでもころがってきた。私は、その場その場に応じて、できるだけ、子どもの立場も理解して、その上での指導であるよう、努力してきた。

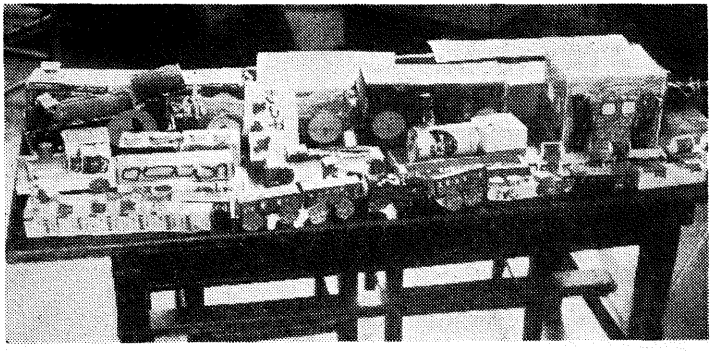
しかし、日が加わるにつれて、子どもたちは次第によく協力してあそべるようになって

いった。年長になった自覚と、つみ重ねられた経験とで次第にたのもしくなってきた。かっては一人ひとりが、おだんごをつくっていた砂場など、大勢が力を合わせて、砂場全体を使って一つのものをつくったりして、私をよろこばせた。





「**展らん会ごっこ**」も計画した。展らん会ごっこといっても、いわば廃物利用展のようなものである。空箱、ビンのキルク、ふた、ひも、布、毛糸、針金、牛乳のふた、缶、ストロー、フィルムの空リル、ホース、木片、スポンジ、など書きあげたら、きりがないが子どもたちも毎日のように何か探して、家から持ちよってきた。不要品の中にも、思いがけぬ程、たくさんに使えるものが見つかった。それぞれ小箱に分類し、いつでも自由に使えるように棚に整理しておいた。子どもたちは分類された材料をいじっている中に、その形や色からもしげきされて、いろいろと考えてくれた。おとなが考えつかないようなことを考えたりもした。こんな時、心から驚ろく先生を、子どもはいかにもうれしそうに見たことだろう。ちょっとした思いつきや、おもしろいものができた時は、とりあげてほめてあげると、たしかに、いいしげきとなった。困っている時は手をかしたり相談にものった。次々にでき上っていくものを集めて机に並べると、またまたつくる意慾も出てくるようだった。陸、海、空のいろいろの乗りものや、テープレコード、電蓄、マイク、カメラのような機械類、いろいろな人形の類、台所セットやポスト、かばんに至るまで各種。



分類して会場にならべ、母親や、他の組の友だちなど入場券をもって見に来てもらった。子どもたちはたいへんな張り切りようであった。テープレコードの所など、声を録音してくれる。係の子どもが、机の下にかくれて、今と同じことばや歌を再生してくれるのだった。年入った先生の声が若がえって聞こえるといって皆で大笑いした。それにもましておどろいたのは、特に男の子が、機械をよく見ているという事だった。もっと意図的に、こういう面をとり入れるべきだと思った。

テープレコードの話が出たが、これを使ってもよくあそんだ。私は子どもと「お話つなぎ」という名をつけているのだが、一人が言ったことばに、順々に一言ずつ、つけ加えて、一つのお話をつくっていく。これをテープに入れておいて、あとでかけてみる。大ていの子どもはよろこんだ。はじめは何人かの子どもの所へいくと、テープが空で廻ることもよくあったが、次第に自由に、想像し、考えて一つの新しい話をつけ加えていけるようになった。いろいろの話ができ上り、そのたびごとに皆でドッと笑ったりしたこともたびたびであった。

秋も半ばになると、子どもたちは一層成長した感を深めた。友だち関係も巾が広くなり、あそびや仕事によって、グループのメンバーの数もふえて、がっちりしたものになってきた。グループでつくる紙芝居やペープサートにも協力のたのしさを味ってくれたと思う。いわゆる問題児として私を悩ませつづけてきた三、四人の子どもも、この頃になると、人目にも目立って「よくなった」と言われるように成長してきてくれ、こんなに嬉し

いことはなかった。

三学期は何といっても、ひなまつりが、指導のいい場であった。私の園の恒例により、ひなまつりは年長組の二組で、司会まで子どもが受けもって、一切をすることになっている。自分たちの母親や、年中、年少の組をたのしませるために、劇やベープサートや、リズムあそび、合奏などを、いろいろと計画した。本当に組中が一がんとなって、一つの目的に向かっていった感であった。希望の役になり、子どもと先生が一つになって協力してつくっていった劇、自分の思ったこと、言いたいことを堂々といえる、一人ひとりが、これなら大丈夫——と、子どもに対して信頼がもてるようになっていた。また感心したことは、皆の劇ということで、適役を子ども同志で、推せんすることだった。子どもにとっては、必ずしも主役がいい役とは言えないようだ。そしてその推せんも、子どもの眼が高いことに、またまたおどろかされた。

年長組らしい気持や責任は、自分たちの組だけのことでなく、淡いながら、幼稚園全体のことを考える気持、例えば共同のあそび場のかたづけ、ゆうぎ室の共用の大積木や、誰が散らかしたのか、いっぱいにちらかされた畳の室の玩具のかたづけなど、一日の終りには必ずきれいにかたづけた。年長児らしい責任感と自覚をもつには、適当なしごとであったし、これはとてもよかったと思う。

その一年もいつの間にか過ぎて、つい先日一人ひとりが、園長から渡される証書を、しっかりと受けて、立派に卒業していった。ああ、立派になってくれた！　と、しみじみ嬉しく思ったことだったが、それだけに、私はこの一年に、果してどれだけのことを、あの

子どもたちにしてあげられたか？　と、そっと考えてみる。何か恐ろしいような気がする。まだまだやり足りないと思う。大事なことが、ぬけてしまったのではないかしら？　と思う。たのしくたのしくあそべて本当によかったとも思う。あの時怒らなければよかったとも思う。ずいぶん苦労もさせられたし、何とかわいいのだろうと思うこともあった。なやみつづけていた子どもが良くなって、教師の道をえらんだ喜びをしみじみ感じたこともあったし――いろいろの気持が入り交って、あの子どもたちをもう一度この胸に呼び集めて、しっかりと抱いてやりたいような気持！　そんな今日、この頃である。

卒業間近の頃に、心の底から言っている子どもたちのことば「もっともっと、幼稚園にいたい。飽きるまでいたい。先生とまた、いろいろのことできるもの」「あーあ、とうとう卒業か、つまらないな―」「日曜日なんかない方がいい！　そうすれば幼稚園にこられるもん」……何とかわいいことを言うのだろう。こんなにも幼稚園をたのしんでくれたのかと、今更のようにこちらが、感謝したいような気持である。そして、こういうことばの一つ一つに、ほのぼのとした温かさを感じ、これでよかった、よかったと思うことであった。

二月の頃であろうか、女の子たちが、ころこそと何かやり出した。「先生見ちゃだめよ」と大事そうに箱を抱えている。リボンがなくなったり、錐がなくなったりした。「先生お部屋のどこかに、かくしておくから見ないでね。先生のおたのしみだからね。」私はいっしょうけんめいに見ない努力をした。黒板と棚の狭い間に箱はかくされたり、毎日持ち出されたりしていた。私にとっては一日でもこの気持はうれしかったのだが……。この年令の子どもたちだもの、幾日つづくかしら？　と思った。でもそれは続いた。そして卒業式の朝、ちゃんとプレゼントしてくれたのだった。白い箱にたくさんの穴をあけて、色とりどりの薄いリボンで結び、きれいに飾ってあった。中にはいっしょうけんめいつくったらしい首かざり、腕わ、かみかざり、指わなどが入っていた。協力してつくった人の名前まで、ちゃんと書き連ねてあった。女の子らしい優しい気持に、私はうれしくて、一つひとつ飾ったり、はめたりしてみせた。

卒業してから二日後に、また私はうれしい話を母親たちから聞いた。実現はしなかったが、男の子たちが女の子たちのそれに対して、先生に何をあげようかと相談し、幼稚園の庭中から美しい石を探して、磨いて、それを先生にプレゼントしようと計画したのだそうだ。こっそりとためていたら、或る日どうしたのか、なくなってしまったのだそうだ。本当にがっかりしたとのことだ。今だに子どもは一言もこれについて言わない。男の子らしいと思った。思えば或る日、二人の男の子が「先生にあげる―」と、小さいけれど水色のきれいな石をくれた。幼稚園の庭で見つけたのだそうだ。ありがたく頂だいし、子どもも嬉しそうだったが、今思えば、あの頃からのことだったに違いない。

友だちと相談して、しかも自発的に、こんなことまでできるようになったのだ、しかも男の子たちまでが……と思うと、本当によくここまで成長してくれたと、しみじみ思うのである。

＊　＊　＊

三才児の生活

村石京子

新幼稚園教育要領の第三章1の(5)に次の項がある。「入園当初においては、教師は個々の幼児に特に細かな心づかいをもって接し、できるだけ早く教師や他の幼児に親しませ、喜んで登園するように導き、幼稚園における生活に慣れさせ、安定した気持で幼稚園生活を楽しむことができるようにすること」

ここをよむと実に三才児の保育について、教師のもつべき保育の中心的ねらいがみごとにでていると思う。昨年一年間、三才児と一しょに生活してきたが、その年間の目標とし、毎学期の目標としたことが全くそのまま新しい教育要領の中のこの一節に当るのであった。ただ三才児の場合に年令を限って考えるならば、「入園当初においては」という表現が「三才児においては」とかわってくるのは当然であるし、また「できるだけ早く」ということばを（　）の中に入れてしまいたいという気持がある。

何故なら教師の側の希望としては三才児であっても勿論一日も早く幼稚園の生活になれ、友だちや教師と親しみ、幼稚園の生活を楽しむようになってほしいとねがうのであるけれど、三才児の実態はあまりに幼なく、そして個人差が大きいことに気づくと、できるだけ早くこうした状態になってほしいと念じながらも、一方では決してあせってはならないと反省をくりかえすからであった。

そのため三才児の初期から順調にこの目標に沿ってすべりだした者もあれば、なかなか方向の定まらない者もあったけれど、とにかく年間の目標として三月までには級の全ての幼児が、安定した気持で幼稚園生活をじゅうぶん楽しむまでに成長できるように、教師も幼児も一しょに努力していこうと目指したのである。

○一学期

「できるだけ家庭的ふんいきで」

三年保育の級は十五名であり、この級は男児七名、女児八名で一学級を編成していた。その中は四月生まれから三月生まれまでにわたっている。満三才頃の年令において生まれ月による差のあることは当然として考えられる。同じ一級の中で生活しているけれど、一方の幼児はついこの間満三才の誕生日を迎えたばかりであり、一方ではもうじき四つになるという子どもである。教師はこの生まれ月による差をよく考慮しなければならない。また一面、子どもの発育はその発達がある方向にかなり速いものをもつ子どもと、比較的ゆっくりだが充実している者など個人差も大きい。更に発達的なものだけでなく、性格によっても非常に生活の上の形に現われるものが異なってくる。進取の気性に富んでいる者と、引っ込み思案の性格とでは同じ内容をもっていても、ずいぶんと現われたものは違っている。さまざまのことを考え合わせると、わずか十五名の級であるけれど個々の幼児に特に細かな心づかいをもって接するという気持をきわめるには決して少ない人数ではなく、む

しろ手一ぱいという感じさえしてくるのであった。

この子ども達に共通なことはこの四月から幼稚園という新しい社会集団、それは家族集団とは別の意味をもつ集団のメンバーになったという点である。子どもが新しい集団の中に抵抗なく入るために、できるだけこの新しい集団のふんいきを家族集団に近いものにしたいとのぞんだ。子ども達には気やすく緊張なく入ってもらいたいという気持のもとに、今まで家でしていたと同じように自由にふるまい、何でもしたいことを好きにやってあそべるということを身体で感じとってもらえるようにした。おもちゃも個人的なものを揃え、そして数も比較的豊かに揃えた。また父母にも、幼稚園に行ったらこうこうしなさいというようなよい子の規約を子どもに与えないでほしいということを話し、あるがままの姿を見せてもらえるようにしていった。

このような配慮のもとに一学期をふみ出したが、やはり一学期はさまざまのことがあった。男児ではかなり攻撃的で落ちつきのないAや、心配性でうまくみなの中に入れずそのいらだちが自分の思いとは逆にじっとうずくまってしまったり、あるときは暴れてしまったりするBに特に手がかかった。女児はわりあいに集団生活にすっと入れたがやはりちょっとしたことで不安定になって泣く者が二〜三名あったが、中でもC子は今にこにこして遊び出せたと思うともう次の瞬間には大きな声をはりあげて泣き出すことがたびたびであった。ま

ママのとこへ行きたいのよ

ぼく、さかさまに上っちゃうよ

た、はじめの頃順調に園生活の一歩をふみ出したように見られたD子は、おもちゃをとりあうと絶対にゆずらずにその剛情さに目を見はる思いをする折もある程であった。ちょっと目をはなすと泣き出すC子に片手をあずけながら、おもちゃで元気にあそび出した数名にほっとする間もなく、Aはせっかく他の子どもがつくった積木を体あたりでくずしてしまいたちまちけんかが始まる。やっとなだめた時、今度はままごとの場でD子が他の女児の使っていた人形を強引にとろうとする。片方ははなすまいとし、D子は無理にとろうとしてとうとう相手の子どもの洋服にむしゃぶりつき相手は泣き出す。こんなことのくり返しも最初の数週にはよく起ったが、はじめは短かかった保育時間に順次のばして通常の保育時間に落ちついた頃から、友だち関係も次第につながりができて、一しょにあそびたいという意識が少しずつみられるようになった。教師が仲立ちをすれば、かごめかごめとか、あぶくたったといった集団あそびが喜ばれるようになったのもこの頃である。

保育内容の面では一学期は幼稚園の生活になじむことと、必要な生活習慣を身につけることが中心であるから、自由あそびが殆んどといってもよい程でその間に一しょにうたをうたったり、好きにえをかいたり、はさみのあつかいになれたりすることなどを行なっていった。

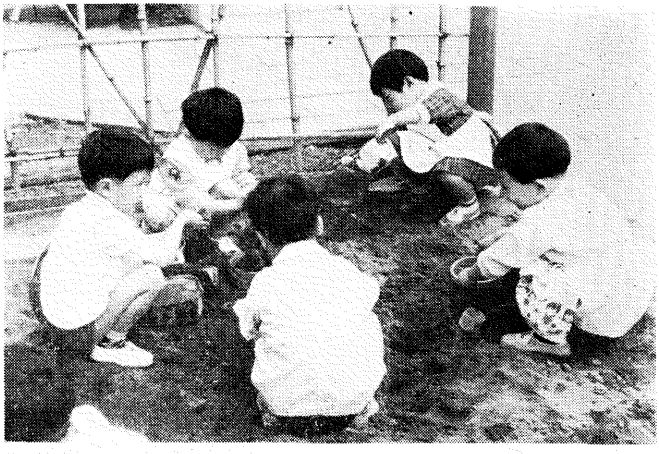
○二学期

「いろいろな経験をする」

二学期は幼稚園や社会の行事が三才児の保

アブクたった　にえたった

お砂場



電車ごっこ

育内容の中にもたくさんもられていった。運動会、遠足、芋ほり、クリスマス、お正月を迎える、等々。これらを六領域におりこんだ活動をし、更にその他にも経験内容を豊かにしたいと心を配った。例えば一学期にはあまりあつかわなかった描画や製作の新しい材料も少しずつ入れていったりもした。

日の経つのも早いけれど、子どもの成長も加速度的である。この学期の出だしにも、長い夏休みのあとで多少幼稚園での習慣や心の安定がくずれた時期もあったけれど、これは一学期のように白紙から染めていくのではないのでできていくのも早かった。しかし困ったこともあった。一頃おさまっていたC子の泣きぐせがこの学期の中頃からはじまって、いろいろ手をつくしたけれど結局冬まで持ち越してしまったことである。（これは三学期の始まりを契機としておさまることができたが。）このことをのぞけば級の生活は軌道にのり、破壊活動やトラブルは見違えるようにへったので、のびやかにそして落ちついた生活をもてるようになった。

○三学期

「みんなで仲よく」

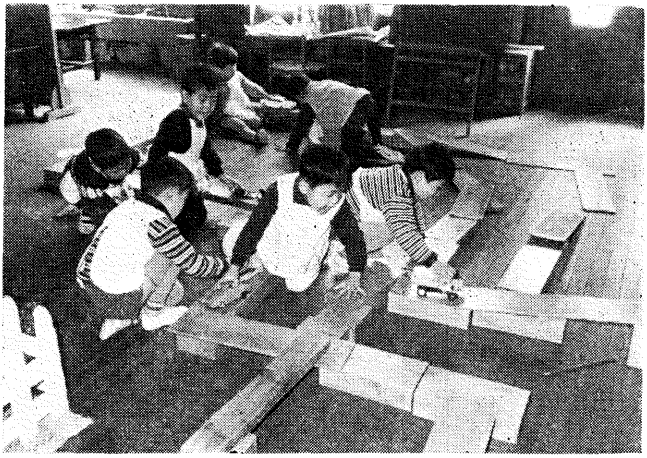
三学期は、間に入園検定のため園児は休みの日があったりして暦の上よりも登園日は少ないけれど、やはり実質としては最も充実を得、まとまりをもった学期であったといえよう。この時期の子どもの成長をみると、それ以前は遊ぶにしても教師や友だちに誘われるから遊ぶとか、遊具や玩具がそなわっているから遊び出すというような、なかば他からの働きかけによって動き出す場面も多かったが、この頃になって全体に積極性がまし、あそび方やおもちゃの扱い方も一通りから一歩でて、いろいろ工夫があっておもしろくなってきた。この頃以前と比べて目立って進んだ点は次のようなことである。（これは勿論、三才児の程度としてである。）

●あそびに目的をもっている。

お誕生会ごっこ

●自発的にあそびに参加できる。
●あそびの役割をはたす。
●あそんだあとの始末がすすんでできる。

また友だち関係にも巾が出て来てグループであそぶことが多くなり、いわゆるごっこあそびが盛になってきた。例をとってみると、幼稚園ごっこ・お店やごっこ・パトロールごっこ・高速道路線の建設・動物園ごっこ・アトムごっこなどのあそびがくり返し行なわれ、次第にそのあそび方も複雑になっていった。またこの学期には、教師の側からの働きかけで劇あそびの簡単なものをやってあそんだこともある。



高速道路つくってあそぼう

ごっこあそびの盛になったことの原因は、友だちあそびが活潑になったことと、大ぜいのグループ（級全員であそぶという形もよくとられたが）のあそびがおもしろくなってきたことにあるといえよう。そしてはじめはみながばらばらであったのが、友だちとあそぶ楽しさを知り、それをより楽しく続けるために、個人個人が社会性を伸ばし協調性を高めることの大切さを自然と身につけていったことも大きな要素となったと考えられる。

＊　＊　＊　＊

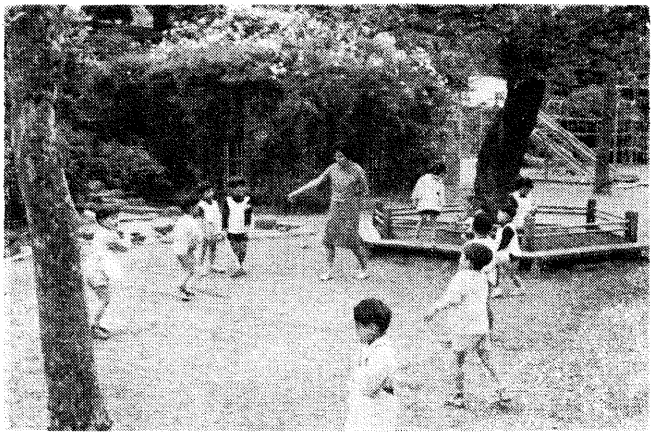
三学期はみんなであそぶ楽しさを心から味わった。しかし学期末にかぜなどで欠席の子どもがぽつぽつと歯がぬけたようにいると、子どもの側からも友だちを待つ気持が強くなってくる。そのような折に来年度はもっと友だちが多くなることを話すと、そうしたら今までよりもっと大ぜいであそぼうと期待し、新しく入る友だちと一しょに始まる四月の新学期を楽しみに待つ心が日に日に育つのであった。

四才児の友だち関係とごっこあそび

関　治　子

四才児の一年間の生活を通して、教師の意図と、幼児の活動の実際をとりあげ、再考してみたいと思う。

三才児として一年間幼稚園生活を送った十五名に、新入の二十名を加えた三十五名の組である。何日かたつ間に、幼児期の特徴とは



教師も一しょに野球をする

いうものの、自己主張の多い、自己中心性の強い幼児が多いことを感じた。そこで、

四才児の組の指導目標

○幼稚園生活を楽しむ

○生活習慣を身につける

○友だちと協力してあそぶ

○創意ある表現をする

更にこの組としての指導目標

○友だち関係（教師との関係も入る）と幼稚園生活（社会生活）を円滑に進めていく

このような点を強調して指導していく必要があると考えた。

友だち関係

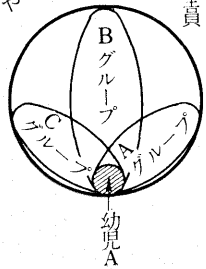
四才児の組の四月に、よく経験することであるが、新入の幼児の方が、何人かの例外を除いては、緊張しながらも、楽しくあそびはじめ、三才からいる方が、何か不安定な状態がみられたりする。三日目位になると、あそびに調子が出てくるが、新入の方が、興奮状態なのか、遊具をどんどん移動したり、乱暴に扱ったり、あそびの持続時間も短く、前からの幼児の方も、それにひきずられるありさまで、何とも落ちつかない。あそびらしいあそびも発展しない。一週間位すると、前からの幼児同志がグループになってあそびはじめた。こちらも、つとめて集団あそびなどで、いろいろな友だちと共にあそぶ経験を入れていく。だんだんに各種の遊具への興味を示し、あそび方も工夫するようになってきた。

こうしていくうちに、友だち関係が固定しかけてきたが、その間にも、衝突があったり、泣いたり慰め合い、仲なおりしたりというように、変っていることがある。

友だち関係をみていると、登園直後に一しょにあそぶ友だちと、暫くたってから一しょにあそぶ友だちというように変る場合、また一つには、あそびの種類によってAグループとあそんだ後、Bグループと一しょにあそぶ場合とがある。つまり、A図のように、組全員の中に、何人かよくあそぶ友だちが大体きまっていて、その中で時と場合によってAグループ、Bグループをなすという傾向にあるようだ。

中には、はっきり三人だけのグループに固定している場合もある。また、一人ぽつんとして積極的にあそびに入らず、皆の動きをみている幼児Bにも、や

A　図



はりA図の動きがあることが確かめられた。

一学期の間は、この動きがはげしかった。人数も二人から四、五人というところで、多い時には、二種類の平行したあそびで、九人ということもあった。

二学期三学期の間に、あそぶ友だちのすっかり変った幼児もあるが、あそぶ友だちの顔ぶれが決っている幼児もあり、三学期の終り頃は、割合はっきりきまっていたと思われる。

友だちの関係は、ある程度、安定感をもっていることが必要だが、余り特定の人にだけ固定してしまうのは、よくいっている場合はよいが、独占、排他、主従関係におちいってしまう場合も考えられるので、A図のようになっていくことが望ましいのではないかと考えている。

次に、これは幼稚園であらわれた性格を含めての友だち関係の特徴を捉えた例として挙げてみることにする。

一学期の終りに、母親たちと、幼児についての話し合いの機会を持った。幼児同志が、よく一しょにあそぶということでなくて、話題や問題の共通と思われる数人ずつを、私が選んだ。

Aグループ。小学生の兄姉をもつ末子ばかりで、友だち関係がスムーズにすべり出さない。自己中心になることはないが、意志が強固で、やたらな妥協をしない。

Bグループ。長子の男児ばかり、何れも一、二才の弟妹がいる。一人ひとり、気持はやさしいのであるが、幼稚園という社会集団の中では自己中心的、時には攻撃的で、なかなか自己というものの調節がとれない。

Cグループ。長子の女児ばかり、何れも一才から三才の弟妹がいる。大体自立心が強く、身のまわりのことや約束などはよくわかり、友だち関係も、比較的スムーズにいく。

Dグループ。環境は異る、陽気だが、はにかみが強く、不和雷同型、しかし、グループ意識は強い。

Eグループ。女児ばかり、何れもまだ友だち関係が不安定、性格は異る。

Fグループ。男児ばかり、素直で友だち関係も抵抗感がないが、強いものにおされ易い。

D、E、Fは二学期三学期と経ていくうちに、大分特徴や、性格のあらわれ方に変化があったが、A、B、Cは、兄弟関係という環境からくる共通のものがあるのだとしたら、

お家ごっこの役割をきめる

友だちと花一もんめをしてあそぶ

と考えさせられてしまった。

幼児のごっこあそび

次に、この一年間の幼児の活動の中から、四才児としてのごっこあそびの実態を実例にそって二、三記してみよう。

1. 運動会ごっこ

春に、小運動会を経験した。友だち、母親と共に、ゆうぎ、競技をしてあそぶ。次に、いろいろな領域で、これを再現する。展開してあそぶことを考えた。たまいれの場面を、皆で、赤白の球をつくって、壁面の網の中にはりつけたり、人物をはりつけたりする。音楽リズムの面で、運動会ごっこから、オリンピックごっこと称して、開会式、水泳競技、陸上競技などのまねをしてあそぶ。体操やダンスを、創作（勿論初歩のもの）をして、やってみて、皆にまねをしてもらう。また、リレーに似た競技をしてあそぶ。これらは、大体一学期のことである。

2. 電話ごっこ

日常、ままごとやのりものあそびは、電話を使う場面がよくみられる。電話のみならず、組木で無線のマイクを作って、話をしたり、こういう会話は、あそびの上でも重要な役割を果たしている。二学期に、電話ごっこのうたを覚え、それから歌詞をかえて、「たろう」というところを、この組の幼児の名を入れて「はいはい、私はひでとです！」。次に「ままごとあそびをいたしましょう」のところを「エイトマンあそびを……」。こうして、皆と一しょにうたうことをしてみた。だんだんに、この歌から離れて、自分のなりたい人物になって、電話で話をした。はじめのうちは、私が、助けて、三人の会話のように中継していたこともあったが、時間をかけていくうちに、口数の少ないD子が、母親になりきって、「今、お洋服をぬっているところですよ」。「誰のですか」。「ママのです」。などと話し出すと、ほほ笑ましい。口の達者なE夫は、「こちらは○○会社の人事課です。あ、ちがいました。庶務です。今度庶務になったんだ。はい、今、ちょっと忙がしいんですけど」。F夫は、「今、ロケットに食糧をつみこんで発射します」。こんな調子の話がつづく。G子は、「おかし屋さんですか。これからお誕生会をしますから、ケーキをもってきて下さい」。また、お当番になった人が、マイクを使う感じで、皆に伝言したりというようにしてあそんだ。

3. お店やさんごっこ

組合員が、さく画からぬけ出して、絵をかくことが、大分はやって好きになってきたのが、二学期の半ばすぎ、そこで、二学期末に

絵によってあそべる「絵合わせ」をつくった。説明や、紙を切ることなどは教師がして、あと、わかるような絵をかくのであるが、これは、要領がわかると何でもないのだが、兎なら兎を紙一ぱいにかくということが、なかなか四才児にはできにくい。そんな場合には、一枚の紙に兎を二つでも三つでも、余白のないようにとことばをはさむ。こんな経験を経て、目的をもった製作や話し合いを、三学期に「お店やさんごっこ」として計画した。まごとからお店やさんがよくみられる。中でも、絵本のうりかいあそびなどさかんで、うりかいの興味も大いにあるところである。

幼児の製作物（うるもの）が相当数必要で、いろいろとつくらねばならないが、興味の持続も考え合わせ、三学期はじめには、お店やさんごっことして幼児に話すことはさし控えた。そして、ぼちぼち製作物を揃えていった。

一ケ月たった二月八日、室内あそびの多い時機で、おかしや、パンやなどお店ごっこも多い。でき上った製作物を示して、「お店やさんごっこ」の相談をもちかける。皆、目の色を輝かして相談にのってくる。皆の考えたお店は、おもちゃや、おかしや、本屋、果物や、酒屋、花屋、おそばや、かばんや、お人形や、デパート、自動車や、お魚や、である。今、うるものができているのは、お人形や、かばんや、本屋、あとはおかしやと花屋かくだものやということになった。次の日になって、「先生、私、おかしやと花屋がいいと思うわ。考えてみたんだけど」。といって一生懸命のH子もいた。その後、相談しながら製作をつづけていったが、二月中旬に一週間のブランクがあった。（入試のため休園）ひな人形つくりから、こけし、壁かけ人形、指人形と、お人形やの材料も数がふえてきた。

三月四日、いよいよ十三日に開店して、他の組の方に買いにきて頂くことになった。皆も、はりきっている。三月十二日、売る人をきめる。希望のお店をきめるが、多いところは話し合いで少ないところにいく。お店のかざりつけ、ねだん表つくり、招待状を出す、おつり銭つくり、などがこの日の仕事だった。

三月十三日、お店やさん開店

お人形やさん（人形、動物、ロボットなど）

おすもう、こけし、

つり人形、赤ちゃん人形、

指人形、手足のうごく人形

かざり人形

（材料は紙・布・牛乳のふた紙・モールなど）

かばんやさん

おさいふ、バスケット、ハンドバッグ、かばん

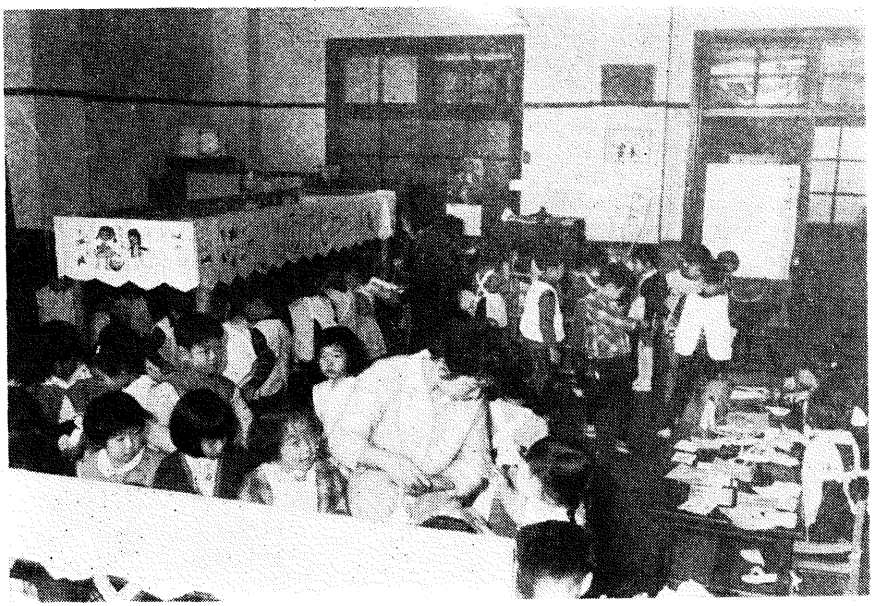
（材料は紙・箱など）

本屋さん

絵本（物語、「親指姫・三匹の子豚・エイトマン・「ようちえん」など）何れも字はなく、表紙だけ字をかいたものもある。

協力して高速道路をつくる

お店やさんに買いに来ていただく



おかしやさん
キャラメル、あめ、チョコレート、ビスケット
（材料はタバコの空箱・牛乳のふたとふた紙・スポンジ・段ボール・クレラップ・銀紙など）

登園した幼児から、売るものだから大切に扱うということで、組の中で、自由に売買してあそぶ。いささか、興奮気味だが、活潑に大喜こびであそび、つり銭を配分したり、おもしろそうにあそんだ。その後、お店を整理して、いよいよ、交代制でお店の人になることにして、買いにきて頂く。声をからして「いらっしゃい!! いらっしゃい!!」と大さわぎ。そうかと思うと、だまって、そっと、売るものをさし出す幼児もいる。昂奮のさめやらぬまま、四、五十分であらかた売りつくして、お店やさんはとじられた。残品を二点ずつ組の中で買ったが、自分個人のものという概念がすっかり外れたのか、自己主張もなく、静かに選んでいた。組全体の一つの目的である活動に、それぞれの気持が向いたように思う。興味の程度に個人差はあるが、協力してつくるとか、かわるがわる売り手になるなど、多面的な活動で、作品としては、それなりにつたないものだが、四才児としての協力ということを身につけるには、無理なく入れるよい機会であった。興奮をどのように処理するかは、教師の問題として反省している。

四才児のごっこあそびは、一年間に、随分変化し、成長していくものである。勿論発達段階とは思うが、教師が、はじめは中心になったり、或いはかじをとったり、助言や補佐にまわったり、見守るなど、幼児の活動をよくみて教師としての行動を判断することも必要と痛感する。一年終った現在、個人差はあるが、四才児として活発な活動がみられるようになったことは嬉しく思われる。

五才児の一年間

守永英子

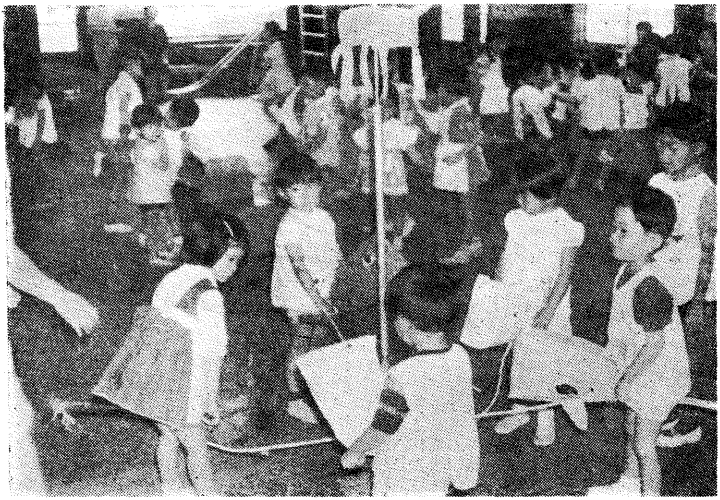
最年長の組といっても、四月頃の日誌を開いてみると、〝こんなだったのかしら〟と思うような記録が残っている。〝四月十五日、身体測定……M夫がひとりで衣服をぬぎ着しようとする気持をみせてきた〟。〝四月二十日、友だちとの遊びにあまり積極的でなかったH夫が、他の六人の男児に加わって元気に大きな砂山を作ったり、トンネルを掘ったりした〟。このような小さなことがらがその頃の私の毎日の喜びだったに違いない。

これらの子どもたちに、このような人になってほしい、このようなことを身につけてもらいたいというねがい（目的、或いは目標ともいえる）はいろいろあった。しかし、それらの中で何か一つ二つあげるとすれば、自主および自律の精神と、協同の精神の芽ばえをつちかっておきたいということかもしれない。

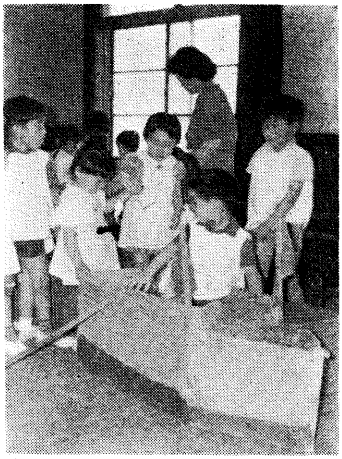
四月の末、最年長組になって初めての共同製作として、〝鯉のぼり〟をとりあげてみた。共同製作といっても、この時期ではごく淡いもので、初めから子どもたちがその意識で計画的にすることはできない。先ず、昨年秋、運動会の絵を二人ずつでかいた経験を、一歩進めたような形で行なうことにした。ちょうど自由遊びの時にS夫が鯉のぼりを作ったのを機会に、「もっと大きい鯉を作らない？」「紙が大きいから、お友だちといっしょに作ったらどうかしら」というような誘導をした。先ず、K夫、S夫、Y夫がいっしょにひ鯉をつくり、そのうちS夫がまた吹流しを作り始めた。この三人と親しいM夫が「僕もする」と加わったので「今、お母さん鯉ができたけど、あと何を作るといいかしら？」と言うと、M夫はお庭の鯉のぼりをみてきて「お父さん鯉をつくる」という。そばでよくお友たちの活動をみているT子がM夫に「いっしょに作ろう」と申し出て、いつもあまり接触のないM夫とT子が、ま鯉をつくった。続いて、いつもはあまり積極的でないI夫とO夫がいっしょに参加してきて「それじゃぼくたちは、赤ちゃんの鯉作ろう」ということになり、ここで最初の一グループが自然にでき上った。それに刺激されて次々とグループができてきて、結局、全部で六グループに分れ、或るグループは四人、或るグループは六人あるいは七人になった。内容的にみれば、あるグループは、ま鯉、ひ鯉、子どもの鯉、吹流しとにぎやかにつけ、あるグループは子どもの鯉がなかったり、吹流しが二つできたりして、それぞれ、各グループの力に応じたものを作った。個人別にみれば、一人で一つ作った人、二人で一つ作った人、またその上にもう一つ作った人、一人でそれぞれ違う相手と二種類作った人、まだ自分で作るというより、方々に顔を出して「手伝ってあげたの」と得意になる人、積極的でなく受身で参加した（数人）などその参加の仕方はいろいろであった。しかし、各グループの作品を丈夫な

竹につけて保育室に飾ってあげ、また各グループで鯉のぼりをもって写真を写したときには、みんな喜び共同製作の楽しさがいくらかでも感じられたようであった。しかし「僕たちの鯉のぼり」というよりは、やはり「これが僕の鯉」という気持の方が全体には強いようであった。

ゆうえん地あそび　（メリーゴーランド）



当園では毎年六月に研究会を行なうので、五月下旬より、遊園地あそびを計画した。先ず、子どもたちが遊園地というものにどの程度の関心と知識を持っているかを知りたいと思い、自由に遊んでいる時、二、三人の子どもと絵本の遊園地の絵をきっかけに話し合ってみた。その囲りに集ってきた子どもたちのたいていが遊園地にいった経験があり、楽しかったことなど話しがはずんだ。いつもひとりで工夫していろいろなものを作るS夫が、やがてシーソーを作ってみせにきたので、もぞう紙の上に小さな遊園地を作ってみた。約三分の一が参加し、シーソー、ぶらんこ、鉄棒、ジェットコースター、すべり台、ひこうき、池とボート、池と魚、橋、切符売場などができた。四日後〝遊園地あそび〟についての話し合いをした。〝鯉のぼり〟の時は、子どもたちの活動の結果が自然に共同製作としてまとまるようにことを運んだが、今度の活動では、子どもたちが計画をたてることに参加するようにしむけ、次の四つの点について話し合った。一、遊園地の遊具、施設について知っているものをあげてみる。二、あげられたもののうち、作りたいもの、作れそうなものを選ぶ。三、自分は何を分担するかを各自がきめる。四、各グループでどうやって作るかを相談する。このうち一から三までは全員で話し合い、四、については、情況によって私も相談に加わった。結局、汽車、自動車、飛行機、ボート、ジェットコースター、メリーゴーランド、釣堀、すべり台、ベンチ、馬、食堂、劇場などがあげられた。乗物の材料はダンボールの大きな箱が主であったが、一番チームワークのよかったのはボートの組で、三人（男）で相談して「先生、紙ちょうだい」「先の方を紙でこういうふうにするの」ととがらせるつもりらしい。そこでボール紙をあげると「ここをこうするから三枚ちょうだい」という。ボール紙を折って、ダンボールの箱にあてている人、セロテープでそこをはる人など、その協力ぶりには驚かされた。



ゆうえん地あそび（ボート）

し、結局、王さまがさわると何でもパッと金になる（ペーブサートの裏を金紙ではっておく）ところがおもしろいと採用されて金の好きな王様の話に決った。ペーブサートのやり方も、人形を動かしながら対話をする普通のやり方を考えていたところ、自分たちで知っている筋に従って自由に練習しているうちに、自然に話をする人と、人形を動かす人とに分れ、その方がやりいいと言うので、そうすることにした。子どもたちの考えで押し進められるところはできるだけそれに従い、行きづまるときは私もいっしょになって考えて計画を進めた。この活動の中で、「メリゴーランドの馬の頭は紙袋で作ったら？」「釣ったお魚を入れるバケツもいるね」「ジェットコースターのつかまるところ作るから、この位の長さに棒を切ってよ」など、子どもたちは自分の頭で考え、意見を言うようになってきた。遊び方を相談した時も、「遊具の係は組の当番がなるといい」「作った人がその遊具の係になるのがいい」と意見が分れ、十一対二十三で後の意見に従うことにした。J夫の意見で、係は二人が適当ときまり、遊具を作った各グループから三人でボートを二そう作ったのは二日がかりの仕事だったが、私が手をかしたのは、オールの棒をちょうどよい長さに切ることと、それを通す穴を切り抜くことだけであった。ジェットコースターなども、どうやって作るつもりかしらと思っていたところ、自分たち（二人）のプランができていて、材料をそろえてあげるだけででき上った。劇場のグループは十三人なので自分たちだけでの相談は無理らしく、「紙芝居がいい」「ペーブサートがいい」「小人と靴屋の話にしよう」「兎の遠足というお話をつくろう」など、いろいろ意見がでてまとまらないので、私も意見を出ジャンケンで二人ずつ決めた。研究会には組の子どもたちだけで遊園地を開いたが、六月十四日には、遊ぎ室で遊園地を開き、他の組の子どもたちを全部招待して、大にぎわいであった。遊具の係以外の、組の全員がお客さまの案内係となって小さい人達を世話し、年少組の子どもたちは「後楽園のようだ」と喜んだ。自分の頭でいろいろと考えて意見を言い、計画に参加すること、工夫してものを作ること、協力して作ること、自分たちで遊び方をきめて、そのきまりに従って遊ぶこと、小さい人たちをやさしく世話することなど、この活動の中で得たものは大きいように思う。しかし中には、「ひとりで自動車をつくる」と主張して共同製作を拒んだもの、気持はじゅうぶんでも三人足並がそろわず仕事がはかどらないもの、自分の分担したものを作らなければならないという気持が弱いものなどいろいろあったが、それでも鯉のぼりの共同製作の時より一段と進歩が感じられた。

この活動の中でも、子どもたちの考えを聞き、それを尊重することは私の心したことであったが、実際、子どもたちは、することを一方的に指示されるより、自分の意見を聞か

れとりあげてもらうことを喜び、活動が自主的、積極的になるようであった。

ちょうど一学期も半ばのある日こんなことがあった。お弁当によく菓子パンと牛乳を買って持ってくるN子が、朝、「今日はお店がお休みで、パンが買えなかったの」と告げた。私は、N子のつきそいの人が家に戻ってお弁当をとどけてくると思ったが、「今日はお弁当がないからたべない」とN子の様子がおかしい。そこで、N子の家に電話をすると「いつも家からのお弁当をいやがり、パンを買う、牛乳を買うと勝手を言い、今朝もそれで出かけましたが、こらしめにお弁当を届けまいと思ってました」との返事。とにかくお弁当を届けていただくようにお願いして、N子に何と話そうかしらと考えた。お昼になって、家から届いたお弁当をN子に渡しながら、何気なく「よかったわね。お店のパンよりお家のお弁当の方がいろいろ入っていて」と言ってみたが、N子は沈黙。そこで「毎日お店のパンばかりより、いろいろなものを入れて下さったお弁当の方がN子ちゃん大きくなれるんじゃないかしら。先生はそう思うけどN子ちゃんどう思う？」「……」「やっぱりそう思う？」N子の表情がやっとほぐれて、にこっとうなづいた。「それじゃ先生と同じ考えね」と私はホッとした。あとで聞くところによれば、N子は「どう思う？」がたいへん気に入って、家でも、「N子はこう思うけどマ マ どう思う？」を連発。家中ではやってしまったそうだ。それからN子のお弁当は、毎日、母親の手づくりに変った。

二学期はいろいろと行事が多い。運動会、遠足、お芋ほり、子ども動物園への園外保育などで忙しい。しかしそれらと同時に言語の面に力を注いだ。もちろん、今までもしてきたことであるが、組全体で先生の話を聞く態度や、理解、自分のしたいこと、してほしいこと、疑問などがすなおに口に出せるように、これらのことを身につけておきたいと思った。お話をきいたり、テレビをみたりする機会を多くし、夏休みや、遠足の経験などを話したり、テープに吹きこんでそれを聞いて楽しんだりした。また、知っているお話や作ったお話を、ペープサートや紙芝居にして、お友だちにみせ合ったりした。これらの活動の中で、自分たちでグループを作ったり、その

リレー

中で役割を受け持ったりする相談は、子どもなりにかなり上手にできるようになったし、自発的に参加しようとする態度もできてきた。みんなにきこえるような声ではっきり話すことは、かなりむつかしいことであったが、二学期の末には、お友だちのペープサートや紙芝居に大分興味を示して、よく聞くようになってきたので、見せる方の拙さもそれで補うことができた。

三学期のひなまつりには、毎年最年長組がいろいろ計画することになっているが、子どもたちとの相談の結果、私の組では劇とペープサートをすることにきめた。とりあげるお話も、子どもたちからもいろいろと案が出、私も案を出した。もし大ぜいの子どもが賛成する案があれば、自分の案を引っ込めて、ねりなおすつもりであったが、子どもたちの大部分が賛成し、多数決で採用してくれた。子どもの希望によって、劇とペープサートの二組に分れ、役割も、希望の多いものは子どもの意見に従って、ジャンケンによってきめた。今年度の初めの頃はなかなか口をきかなかったM子が、一人で話さなければならない役を自分で選んだことは、成長ぶりを感じさせて嬉しかった。子どもたちの意見で、ペープサートは「ぽん太の茶釜」とつけ、劇は、出てくる女の子の名前を〃ちこちゃん〃としたいというので「ちこちゃんのおだんご」とつけた。（内容は〃ぶんぶく茶釜〃と〃おだんごまてまて〃を脚色したものである。）自分の役割についての意識は、かなりはっきり持っており、殆どの子どもが自分のお面やペープサートの心棒のつけ方などを注意するだけでさっさと作った。練習の時もみんな大体の筋をよく理解していて、時々助言したり、言いそびれてしまう子どもに言う時を作ってあげる位で進んだ。「子狸が遊びにいく時、お父さんやお母さんは何ていうかしら」「ぽん太さんがやっと帰ってきた時、みんな心

ひなまつり　　ペープサート（ぽん太の茶釜）

ひなまつり　劇（ちこちゃんのおだんご）

配して待っていたんでしょ。何か言ってあげましょうよ。」きまったせりふなどはない。子どもたちはその場面々々で、自分のことばで考えて言う。二、三度繰り返すうちに自分のことばもきまってくるようである。次第にお友だちの役も分ってきて、「ほら、Hちゃんの番よ」とうっかり忘れた子どもにお互に注意する。劇の練習の時はペープサートのグループが観客であり批評家で、「もっと大きな声で」「鬼がもっと元気な方がいいわ」「お地ぞうさまふざけるとおかしいよ」「そこ、いっしょにおどった方がいいと思う」などなかなか意見がある。誰かお休みがあると、「私、やってあげる」と、お友だちの役までよく心得ていて、代役を立派にやってのける。「ここで鬼がうたをうたうといい」「鬼の歌、いいのがないのよ」「じゃあ作れば……」子どもたちはためらいもなく作ってくれた。〃鬼のこどもは遊びます。楽隊をしてあそびます。歌ったり、踊ったり、たいこを叩いて遊びます。鬼の子たちは嬉しそう〃「誰か歌って下さる?」「それくらい先生がしてよ」とY夫。「そうね」と思わず笑ってしまったのも、ついこの間のことである。卒業の頃には、先生と子どもというより、お友だちのような親しい気持だった。私も、迷う時、困った時には、よく子どもたちに相談し、いっしょに考えたものだった。

「ひなまつり、お上手にできるかしらね。」

「先生大丈夫よ。うまくいくわよ。」ずい分と手のかかる子どももいたし、いろいろなことがあったが、別れてみると本当に頼りになるよい子どもたちだったとしみじみ思う。自分の頭でものを考え、自主的に活動し、人と協力でき、負けずに困難をのり越えていく子ども、そんな子どもになってほしいと心から願う。

＊　＊　＊

「耳の聞えない子どもに、どうしてことばを習得させたらよいのでしょうか。この本はこうした問いに答えるために書かれたものです。」と著者は序文に述べている。

実際、この本は、耳のかわりに目と手を使ってことばを習得させる過程が、きわめて系統的に具体的に説かれている。

この本は、全編が六章から分かれており、第一章　感覚訓練、第二章　読話の指導、第三章　発語の指導、第四章　聴能訓練、第五章　言語指導の目的と方法、第六章　教育の条件、となっている。

このうち、どの章を読んでみても、きわめて明確に指導の目的と内容と方法と段階が示されており、聾教育を、私たち門外漢の判断の内側にまで持ち来たったことに対してその労を多とすべきである。

しいて難をいえば、第六章を始めに持って来たほうが、読者が入りやすかったであろう。

またアート紙を使用してあるにしては写真が小さく、不鮮明であることは、この種の本としてはもっと考慮されてよいと思われた。

しかし、ろう児の教育が著者の説くように、「幼児がろうと判ったその瞬間から、たとえ幼児が生まれた直後であろうとも、始められるべき不可欠の条件」であり、この

松沢　豪著　――書評――

「ろう幼児とことばの指導」

村山　貞雄

書がそうした不幸な子を持つ親に拠りどころを与えることは間違いない。

この本を読むと、（教育という営みは本来そういう性質のものであろうが）ろう児の教育がいかに忍耐と根気を要する困難な仕事であるかを教えられる。と同時に、わが国に聾教育が開始されてから約九十年の歴史を持つというのに、ろう幼児教育のこの種の本では、本書が最初で唯一のものであるということはどのように解釈すべきであろうか。この本がろう幼児をもつ多くの親の拠りどころとなることに加えて、ろう幼児の特殊教育に対する社会の理解と研究の向上の出発点になることを祈る。

序文に山下俊郎氏が記されていることばに同感し、私もそのまま本書の推薦のことばとしたい。

「わたしたちはろう児に対してわたしたちの持てる最良のものである所の松沢さんの教育技術を贈ることによって大人としての義務を果たすことができることを深く心から喜びたい。わたしはこの書が世のすべてのろう児とその親たちの上に明るい光を投げかけるものであることを信じている。」

耳とことばの不自由な子の親の会　発行

一〇〇〇円

東京都新宿区市ヶ谷台町八

ヨーロッパの旅（三）

平井信義

今回の旅で、われわれ夫婦の訪問を最も喜んでくださったのは、誰だったろう。それは、われわれを招いて下さったベンホルト・トムセン教授夫妻であった。「よかった、よかった、お二人で来ることができて！」と、教授夫妻は、こもごも言って下さった。何回も繰り返して言って下さった。

実は、最初のうち、家内といっしょにいくことができないかと心配していたのである。向うで出してくれる滞在費は、二人で生活するのにじゅうぶんであるが、二人名義の招待になっていないということで、外務省が家内の旅券を許可しないという話であった。僕は、がっかりした。この前の旅行の時、どこにいっても淋しい思いがしたのは、家内がいなかったからである。美しい景色やゆかりのある建物を見るたびに、家内に見せたいな——と思い、その日がいつか来ればと願ったものであった。

そこへ今回の話。ぼくは、いよいよその日が来た——と、家内を案内する旅の道順をあれこれと考えた。ところが、いよいよ旅券を申請するとなると、きびしい隘路。ぼくは、落胆した。初めは張り切っていた家内も、「いいわよ、無理をしなくても。またの機会もあるでしょうから……」といちはやく断念しようとしている。ぼくは、奮起した。そして、教授あてに手紙をかき、総ての保証をお願いしたのであった。

普段は筆不精で、なかなか手紙をよこさない教授から、折り返し返事がきた。そして、総ての保証を教授がして下さるという書類が同封してあった。「お二人でおいで下さることを、我々はこころから望んでいます！」

われわれがケルンに着くと、早速その晩に、家へ食事に来て

ほしいという教授の要請である。既に、そのことについて奥さまとの打ち合わせができているという話だった。しかし、到着の日、われわれはさすがに疲れていた。殊に、飛行機でデュッセルトルフについた時に重い荷物を持ったまま雨に打たれたり、ケルンでホテルを探すのに心配があったりして、心身ともに疲れていた。そこで、私は卒直にその旨を言って、お断りした。

「全くその通りだ。われわれも日本に着いた時、非常に疲労を感じたものだ。ゆっくりお休みなさい。特に、奥さんに疲れがでないようにね。明日の昼、ご案内しましょう。とにかく、お二人できて下さったことは、本当にうれしい。こころからうれしい。大学の中に、泊る部屋も予約してあるから、明日は移転して、そこで休んで下さい。何かお望みがあれば、何でもいって下さい。すべて医局長のハッハマン君に話してありますから」――到れり尽せりであった。

翌日は、雨もよいのうすら寒い日であった。ハッハマン君が迎えに来てくれて、彼の自動車でホテルから大学内の客員室へ移転した。事務の手続や荷物の整理が終ってから、家内は和服に着替えを始めた。教授のお宅への第一回の訪問が約束されている。奥様も待っていて下さる。そう思うと、胸が踊る。帯を締める手伝いをしながら、和服姿をみた教授夫妻が、どのようにいうだろうかと、考えてみたりした。帯が終ると、家内は足袋をはき、草履に足をつっ込んだ。

大学病院までの道を六、七分歩いて門をくぐると、既に自動車のそばに教授が立っているのが見えた。私が手をあげると同時に彼の方でも気がついて、手をあげた。駈けるように近付いていくと、彼もこちらに歩みを寄せる。そして、家内の方に近寄って、手を差しのべた。固い握手。家内の差し出した手を、両手につつんだ。私との握手になった。

「どうもお待たせしてすみません。家内が着物を着るのに手間取ったものですから…」

「いいえ、少しも。奥さんが日本の着物で来て下さって、何よりもうれしい。すばらしくきれいだ。私の家内も、それを望んでいましたから、どんなに喜ぶことでしょう。どうぞ、自動車に乗って下さい。早速、でかけましょう。」

私は家内の手を支えて自動車にのせその脇に坐った。教授運転の車は、早速動き出した。

「新しい建物がずいぶんふえましたね」と、私は七年前の留学のときを思い出す。

「すっかり変ったでしょう。当時はまだ爆撃のあとがたくさんに残っていましたからね。あなたが、ここを去られてから、もう七年にもなりますかねえ。ついこの間のような気がしてい

るが……」

「まさに七年になります。しかし、先生には昨年お会いしたので、続けてお会いしているような気持です。」

「日本での三週間は、私どもの人生の最上の時といえましょう。本当に楽しい時を過ごしました。徳島の学会で、奥さんにお目にかかったのでしたね」と教授は運転をつっけながらいった。「今の話を、奥さんに通訳してあげて下さい」と、ちょっと振り返ってウインクした。それは、「どうそいたわってあげて下さい」というサインのようであった。私はそれをした。家内か私の通訳にうなずくと、教授はうれしそうに、また、ウィンクをした。

教授のお宅は、病院から一〇分足らずのところにあった。そこは既に郊外に当る。そして、シタットワルト（町の森）の近くであった。通りの並木のほかに、大きな木がそこここにそびえていた。人通りの少ない静かな家並が続いている。教授を先頭に、石の段を数段あがった。玄関口である。その横の壁に並んでいる呼鈴を押すと、かけおりるようにして、教授の息子さんか戸をあけてくれた。

「さあ、どうぞ！」

「どうもありがとうございます。」

家内を先頭に、戸口に入る。そして、家内の差し出した手を握って、息子さんは家内との挨拶を交わした。私との挨拶が終ると、とんとんとんと、二階に上っていった。二階の幾間かが教授の家である。ちょうど七年前、この家を訪れた時のことを思い出した。酔うほどに、「船頭小唄」をうたったのが、この家であった。

二階の上り口のところに、既に奥さまが大きなからだを乗り出して待ち構えておられた。思わず私の手があがる。懐しいお顔だ。ちょうど一年半前と変りがないおだやかな顔だ。ほくは、この顔に接するたびに、ふところに抱かれているみたいに感じたものだった。教授に続いて家内、そして私「最後に令息が二階にのぼりついたとき、私の足は感激でふるえるようであった。いよいよ第二の故郷西ドイツの土を再び踏んだ」という実感がこみ上げてきた。

紱たんのしきつめてある部屋　その周囲の壁は本棚と本とでいっぱいになっていた。教授夫妻は、家内をかかえんばかりに両側から寄り添って、その部屋の南の隅に案内された

「どうそ、気楽にして下さい。くつろいで下さい」と奥さまが言われる。「私どもは、日本ですごした三週間のことをしばしば思い出します。あなた方も、二ケ月間のドイツでの生活を、じゅうぶんに味って下さい。あなた方の人生の、最上の日になるようにね。」

私どもがソファに腰をおろすと、令嬢が現われた。家内との握手。

「ようこそおいで下さいました。両親は、あなた方がおいでになるのを、毎日のようにお待ちしていたのですよ。」――この令嬢のことばを、私は家内に通訳した。家内が頬笑むと、令嬢も頬笑み返して、再び手を握り合った。

「あなたは、いま、何をしておいでなのですか？」

「大学を出て、大学に残って勉強しています。専門は国文学です。十八世紀の文学について研究しています。普段はベルリンにおりますが、いまは休暇で帰って来ているのです。」

「私も、ちょっと独逸文学を勉強しました」と言うと、

「平井君は、ゲルマニスト（独逸文学者）なのだよ」と教授が口を出す。

「ゲルマニストではなく、ゲルマニストになろうとしたのです。」

「カロッサを勉強したのでしたね。」

令嬢は、目を大きくした。

「カロッサのものを私は読んでいません。しかし、現代に生きる立派な詩人だときいています。」

「私は、最初、ティークの童話に興味をもち、ロマンティーク（浪漫派）の勉強をしようと思っていました。しかし、カロッサの『医師ビュルゲルの運命』を読んでから、すっかり心を牽かれたのです。そして、医師になろうと決心するようにもなったのです。」

教授が口をはさんだ。

「私は、リリエンクローンの子どもについての詩が好きです。ときどき、読み返しています。」

「そうですか。それで、外来の壁にかけてあるのですね、子どもの遊んでいる様子をうたった詩が……」

「もう気がついておいでしたか。その通りです。いい詩でしょ。最も好きな詩です。」

そういいながら目を細める教授の顔を見詰めながら、令嬢はうなずくようにした。父親の趣好が自分の専門になった――とでもいうのであろうか。二人がこころをいたわり合っている様子が、その目差しから汲みとれて、ほのぼのと暖いものを感じた。

その時、奥さんが入ってきて、教授の肩に手をかけるようにして、食事の用意ができていることを告げた。

「では、食事にしましょう。あちらへ席を移動させましょう。」

教授は、家内の方に手を差し伸べて、席を立つように促した。家内が立ち上がると、更に肩に手をかけるようにして先を

歩かせた。こうしたしきたりにまだじゅうぶんに慣れていない家内は、ちょっとためらったが、しかし、そのためらいを教授は受けとめて、

「日本では、男性が先にいくような習慣でしたね」と私に目くばせをした。それを通訳すると、家内は思い起こしたように毅然として、先きに歩き出し、そのあとに皆が従った。北の窓に接した隣の部屋に入る。そして、座席に家内が坐ると、右へ令嬢と奥様。左へ教授とぼく。末席へ令息が坐った。令息は、私どもが話をしている間、母親である教授夫人を手伝って、食卓の用意をしていた。私どもが席に坐り終えたとき、バターナイフがでていないのに気付いて、再び立ち上がり、それを持って来た。

「では、カンパイをしましょう」

と、カンパイ（乾盃）を日本語でいって、葡萄酒の壜を教授が取り上げる。正式のテーブルにはビールは出ない。多くは、葡萄酒である。細長く緑色をした壜の口から、コルクの栓を抜きとる。そして、僅かな量を自分のカップに注ぐ。それを舌先で味うようにする。

「いい味だ！」

教授は、自分のカップをおくと、再び葡萄酒の壜を取り上げて、皆のカップに注いで廻った。

「奥さんは、葡萄酒がお好きですか？」

それを通訳すると

「私はいただけないのです」というように家内は手を振る。

「とてもいいお酒ですから、ちょっとでも味ってみて下さい。では、乾盃！」　私は、トイツ語で

「フロースト（乾盃）！」といった。

一と口飲むと、カップを持ったまま、目と目を合わせる。それが、この国での習慣である。じっと、見入るようにする。そして、更にもう一と口飲んで、再び目を合わせたりもする。うまい葡萄酒であった。

「何年の葡萄酒ですか。」

「一九五九年のです。この年のは、とてもおいしい。ライン酒です。」

ぼくは、更にカップを持ち上げて、飲み乾した。

雨模様であった空が、晴れてきたらしい。窓の外が明るくなった。何の鳥かわからないが、チッチッと啼き声を立てている。何羽かの群らしい。飛び交う羽音と窓近くかすめ飛ぶ影が走る。

「静かですね」と、口を切ると、

「りすも来ますし、鳥はまだたくさんにいます。森の近くだからでしょう。」

「東京は、このようなところがだんだんになくなっています。」

「しかし、国立博物館にいった時は、静かでしたね。あのミューゼアムは、日本で最も印象深いものでした。あのとき、あなたに頂いた美術の写真帳は、繰り返し繰り返し見ています。あそこに案内して頂いたのは、本当によかった。」

「私も」と夫人が合槍をうつ。「非常に強い印象を持っています。殊に、古い時代の人間の像——何といいましたか……」と、こめかみに手を当てて、その名を思い出そうとしておられる。

「はにわ——でしょ。」

「そうそう。はにわです。非常に心を打つものがありますね。」

その時、初めて令息が口を開いた。

「両親は、その話をよくしています。非常に気に入っています。」

「あなたもどうぞ、日本へいらして下さいませんか。ご案内しますから……」

「いきたいとは思うのですが、あまりに専門がちがうから……。私は、スペイン語をやっています。言語学が専門なのです。そこで、先日はスペインにいきましたが、日本は遠い…」

「でも飛行機で二十時間です。今日発てば、明日ついてしまう」と私。

「私は、行くなら船でいきます。船旅は落ち着いていて、方々の国の文化を楽しむことができますから……」

「たしかに、飛行機の旅には、味いがありませんね。カロッサにも、飛行機は一足飛びにこの地球の空を飛んでいくが、大地に足をつけ一歩一歩あゆんていく我々の生活に味いの深いことを詠んだ詩がありました。」

私は、再び葡萄酒のクラスを手にとって、日の高さまであげ、教授夫人の目差しを見詰め、それから転じて、教授、令息、令嬢と、最後に家内と目を合わせてから、クラスに唇をつけた。香のよい葡萄酒が唇にしめり、舌にのり、喉もとをすぎていく。一口、二口、……私は、クラスを唇から離さないで、飲みほした。

窓の外ではチチ、チチ、と相変らず鳥が啼き交している。淡い日射しが斜めに入り込み、くすんだ緑の壁に当たる。その日射の中で、小さなほこりのいくつかが、舞い上がり舞いおりていた。

チチ、チチと軒ぎわに、再び鳥の声が起って、再び羽音とともに遠のいていった。と同時に、いま自分たちは、日本を離れて、トイツという国にいるのだ——という感激が、胸の底から衝き上げてきた。

（つづく）

第十三回　幼稚園教育実際指導研究会

――新幼稚園教育要領の深究――

主　催　お茶の水女子大学附属幼稚園　幼児教育研究会

協　賛　お茶の水女子大学　教育研究室・児童研究室
附属小学校・中学校・高等学校

かねて幼児教育関係者の関心事であった、幼稚園教育要領の改訂がおこなわれ、本年度よりそれが実施されることになりました。つきましては、皆様も熱心にご研究を重ねておられることと思いますが、本研究会では、幼稚園教育全般にわたって、新教育要領の趣旨とするところをいっそう深究し、その問題点をさらに解明することを、本会の研究課題といたしました。そして、この機会に、新教育要領をもととして編成した本園の教育課程を発表するとともに、恒例により、本園の実際指導の一端を公開して、皆様のご批正をえたいと願っています。

なお「幼児の教育」六月号を、本テーマに基づく特集としました。

日　時　昭和三十九年六月五（金）六（土）七（日）の三日間

会　場　お茶の水女子大学講堂

講　師

お茶の水女子大学助教授　津守　真
国立公衆衛生院乳幼児衛生室長　船川幡夫
お茶の水女子大学講師　坂元彦太郎
お茶の水女子大学教授附属幼稚園長

実際指導　お茶の水女子大学附属幼稚園職員一同

会員　幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者

会費　三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）

申込期限　五月二十五日までに「はがき」でお申込み下さい。

申込場所　東京都文京区大塚町三五　お茶の水女子大学附属幼稚園　幼児教育研究会

宿泊　ご希望の方は五月二十日までにお申込み下さい。二食付一二〇〇円（サービス料を含む）ぐらいにてお世話いたします。

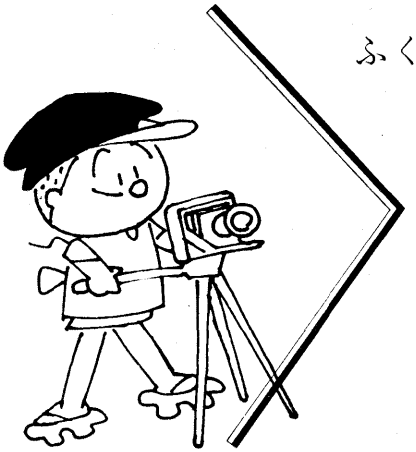
〔予告〕「本園の教育課程」昭和三十九年度版　刊行の予定、実費にておわかちいたします。

日程表

	6月5日（金）	6月6日（土）	6月7日（日）
9.00	受付		
9.30	開会のつあいさつ	実際指導	実際指導
10.00	実際指導		協議会
11.00	協議会		講演 船川講師
12.00	昼食	昼食	閉会のつあいさつ
13.00	講演 坂元園長	協議会	
14.00		講演 津守助教授	
15.00	質疑		
16.00		質疑	

別冊 キンダーブック

物語絵本 夏



ふくちゃんと
おもちゃのくに

マンガでおなじみの横山隆一先生作のふくちゃんが登場致します。ふくちゃんはおもちゃのくにへいって日ごろのおこないを反省しました。
では夏号で！

構成・文／横山隆一
製作／おとぎプロダクション
定価　50円

幼児の教育　第六十三巻　第六号
六月号　©　定価六〇円

昭和三十九年五月二十五日　印刷
昭和三十九年六月　一　日　発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三の一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

☆本誌ご購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

幼児のための紙芝居です

●'64年度幼児テキスト紙芝居全集第3回配本中

ピヨピヨコケッコ、コッコッコ

どうぶつのおやこ
画・野々口　重

べそをかいたてるてるぼうず

あめのひのあそび
画・水沢　研

じょうぶにそだてる
よいこの保健

監修　愛育会幼稚園　植松治子

¥1000　B3版　10枚

東京都渋谷区千駄ケ谷5—17
TEL (341)3400・3227・1458
振替東京 29855
株式会社 教育画劇

坂元彦太郎著

幼児教育の構造

A五判二四三頁
定価 四五〇円

保育の手帖、幼児の教育に掲載した幼児教育論集。幼児教育の基礎的組織、幼児教育課程や指導計画、また六領域についての解説など新幼稚園教育要領の本筋を究明する論集。

岡山県保育史編集委員会編

岡山県保育史

A五判 三六六頁
定価一〇〇〇円 上製本

岡山県下における明治期から大正、昭和の戦前、戦後にわたる保育の歴史。保育施設や保育者、研究組織にいたるまで岡山県下における保育資料を収録してあります。

伊藤隆二著

幼児の知能と知能テスト

A五判 一九八頁
定価四五〇円 上製本

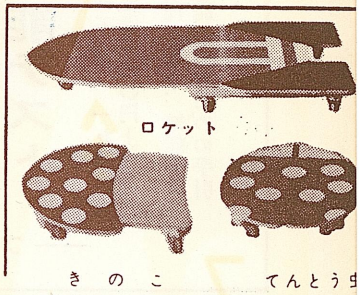
幼児の知能のはたらきや発達過程を説き、知能テストの使用法にまで論究した、知能検査のための手引き書。

——フレーベル館の新刊図書——

ここに　たのしい
のりもの　誕生！

キンダーフロアーカー

キンダーフロアーカーは床上を前後、左右自由自在に走りまわるとっても楽しい幼児の乗りものです。適度なスピードと美しい色彩暖かくやわらかい木製の感触、かわいらしくデザインされたロケット、てんとう虫、きのこなど、どれもこどもたちの夢にピッタリです。



定　価

ロケット	3,000円
てんとう虫	1,800円
きのこ	1,800円

株式会社 プレーベル館
東京都千代田区神田小川町3の1
電話　東京（291）7781～5